

山梨県 荏崎市

# 山影遺跡

送電線仮鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成5年度

荏崎市教育委員会

荏崎市遺跡調査会

山梨県韋崎市

# 山影遺跡

送電線仮鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成5年度

韋崎市教育委員会

韋崎市遺跡調査会

## 序 文

圭崎市を貫流する塙川の右岸は、古来藤井平と呼ばれる肥沃な平地で歴史のある土地柄となっています。藤井平ではこれまでに県営圃場整備事業、市立小学校建設、雇用促進住宅建設、都市計画街区工事等々の公共事業に係り多くの遺跡が発掘調査されて、貴重な文化財が相次いで発見されています。山影遺跡もこのような遺跡の宝庫である藤井平の南端に発見されました。

山影遺跡は東京電力の送電線建設にともない、平成5年度に調査が実施され、面積的には小規模なものでしたが、縄文時代中期初頭という今から5000年程前の遺跡であることが判明しました。詳細は本報告書の本文以降に譲りますが、本遺跡から発見されたものは当時の生活や文化を知る上で貴重なものとなっています。発掘調査によって得られた資料は、文化財として永く後世に伝えて行かなければならないものです。本報告書が原始・古代に生きた我々の先人の生活と歴史をときあかすための史料になればと願っております。

最後ですが、遺跡発掘調査並びに報告書作成に關係して、多大なる御理解と御協力を賜った関係諸機関及び関係者の皆様方に深く感謝を申し上げる次第です。

平成7年3月31日

圭崎市遺跡調査会

圭崎市教育委員会

会長 秋山 幸一

教育長 秋山 利良

## 例　　言

- 1 本書は、山梨県韮崎市藤井町南下条字山影572番地に所在した山影遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、東京電力株式会社の送電線鉄塔建替工事にかかる送電線仮鉄塔建設に伴い行われた。
- 3 遺跡の名称は、小字名を採用した。
- 4 発掘調査は、東京電力株式会社山梨支店から委託を受け韮崎市遺跡調査会が実施した。調査組織は別に示すとおりである。
- 5 整理作業及び報告書作成にかかわる業務は韮崎市遺跡調査会が実施した。なお、「<1号土坑出土遺物>」・「Ⅶ山影遺跡の五領ヶ台式土器について」は樋原功一氏、「Ⅷ山影遺跡出土の石器について」は保坂康夫氏に執筆していただいた。
- 6 土坑出土の骨・土等の調査・分析は、動植物遺存体調査研究会に委託した。なお、人骨部分の分析・執筆は茂原信生氏（京都大学豊長類研究所）による。
- 7 凡例
  - ① 遺構の番号は発掘調査現場において付けたものである。② 補尺は各補図ごとに示した。
  - ③ 遺構断面図の水系標高(m)は数字で示した。④ 補図断面図のは石をあらわす。
- 8 発掘調査及び報告書作成に当たっては、多くの方々から御指導・御協力・御鞭撻をいただいた。一々御芳名を上げることは避けるが厚く御礼を申し上げる次第である。
- 9 発掘調査、整理によって出土並びに作成された遺物及び資料は、韮崎市教育委員会において保管している。

## 調査組織

- 1 調査主体 韮崎市遺跡調査会
- 2 調査担当 山下孝司(韮崎市教育委員会社会教育課)
- 3 調査参加者

岡本嘉一・小田切絹江・小沢高恵・小沢三千子・小沢千代子・小沢治代・小沢久江・小田切昭子・岡本保枝・志村冴子・五味ゆき子・三井福江・深沢真知子・石原ひろみ・小野初美・青山みち枝・有賀京子・清水由美子
- 4 事務局(韮崎市教育委員会社会教育課)

教育長 秋山利良、課長 福田国夫、課長補佐 長野栄太、係長 中嶋尚夫、野口文香

# 目 次

序 文  
例 言  
目 次  
挿 図 目 次  
写 真 図 版 目 次

I 発掘調査の経緯と概要 .....	1
1 発掘調査にいたる経緯	
2 発掘調査の概要	
II 遺跡の立地と環境 .....	1
1 遺跡の立地	
2 周辺の遺跡	
III 遺 構 .....	5
IV 遺 物 .....	5
V 山影遺跡出土の石器について .....	20
VI 山影遺跡の五領ヶ台式土器について .....	26
VII 山影遺跡出土の人骨調査について .....	30
VIII ま と め .....	42
写真図版	

## 挿図目次

第1図 山影遺跡①と周辺の遺跡	2
第2図 山影遺跡位置図	3
第3図 山影遺跡全体図	4
第4図 1号土坑平・断面図	6
第5図 1号・2号竪穴平・断面図	7
第6図 1号土坑出土土器・黒曜石製石器	8
第7図 1号竪穴出土土器	8
第8図 2号竪穴出土土器	15
第9図 遺構外出土土器	16
第10図 遺構外出土土器	17
第11図 遺構外出土土器	18
第12図 遺構外出土土器	19
第13図 石器①（1号竪穴・2号竪穴出土石器、1/2）	20
第14図 石器②（2号竪穴出土石器、1/2）	21
第15図 石器③（1号土坑・遺構外出土石器、2/3）	22
第16図 石器④（遺構外出土石器、1/2）	23
第17図 石器⑤（遺構外出土石器、1/2）	24
第18図 遺跡調査区域平・断面図	40
第19図 遺跡調査区域断面図	41
写真1 山影遺跡から出土した火葬骨	35
写真2 山影遺跡から出土した火葬骨	36

## 写 真 図 版 目 次

- 図版1 遺跡遠景、発掘風景
- 図版2 発掘風景、遺跡全体
- 図版3 測量風景、1号竪穴
- 図版4 2号竪穴、1号土坑
- 図版5 1号土坑発掘風景、1号土坑骨出土状態
- 図版6 1号土坑、遺跡近景
- 図版7 1号土坑出土遺物、1号竪穴出土土器、遺構外出土土器
- 図版8 2号竪穴出土土器、遺構外出土土器
- 図版9 遺構外出土土器、石器
- 図版10 1号土坑出土人骨

# I 発掘調査の経緯と概要

## 1 発掘調査にいたる経緯

平成5年10月に東京電力株式会社山梨支店より送電線(穴山線No38~40)鉄塔起替工事にかかる送電線仮鉄塔建設に関して、韮崎市教育委員会に埋蔵文化財の有無確認依頼が出された。これにより市教育委員会では遺跡の有無確認の調査を実施したところ、No39鉄塔仮設地に土器片が出土した。その結果を踏まえて、市教育委員会と会社側で協議を行い、また地権者である山田厚氏の御協力を得、遺跡名を山影遺跡、調査主体を韮崎市遺跡調査会として、工事に先立って仮鉄塔建設予定地の100m<sup>2</sup>を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。

## 2 発掘調査の概要

発掘調査期間 平成5年11月12日～12月13日

調査は、遺跡の有無確認調査段階で水出床上直下に形成された暗褐色土層から上器片等の遺物が出土したため、これを遺物包含層とし、重機を使用し基本的に遺物の出土した確認面まで耕上を行い、10m四方の調査区域内を田の字形に5m四方の区画に分け全体に堀り下げを行っていった。測量の基準は建設用の杭を利用した。

# II 遺跡の立地と環境

## 1 遺跡の立地

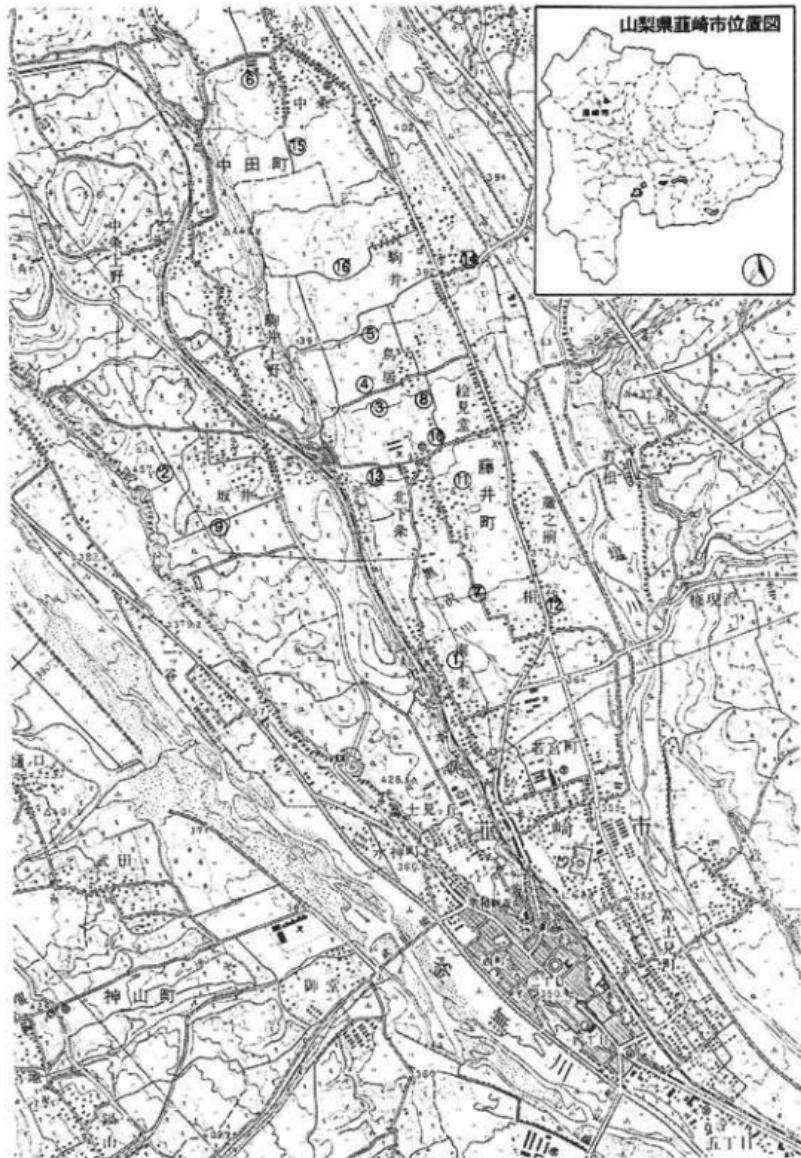
山影遺跡は、山梨県韮崎市藤井町南下条字山影地内に所在し、南下条集落東方の国道141号線と黒沢川に挟まれた水田地城に立地した。遺跡周辺は七里岩トンネルの開通により国道141号線と20号線とがつながり開発の進む地域となっている。

韮崎市は、山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的には山地・台地・平地の三地域に分けられる。

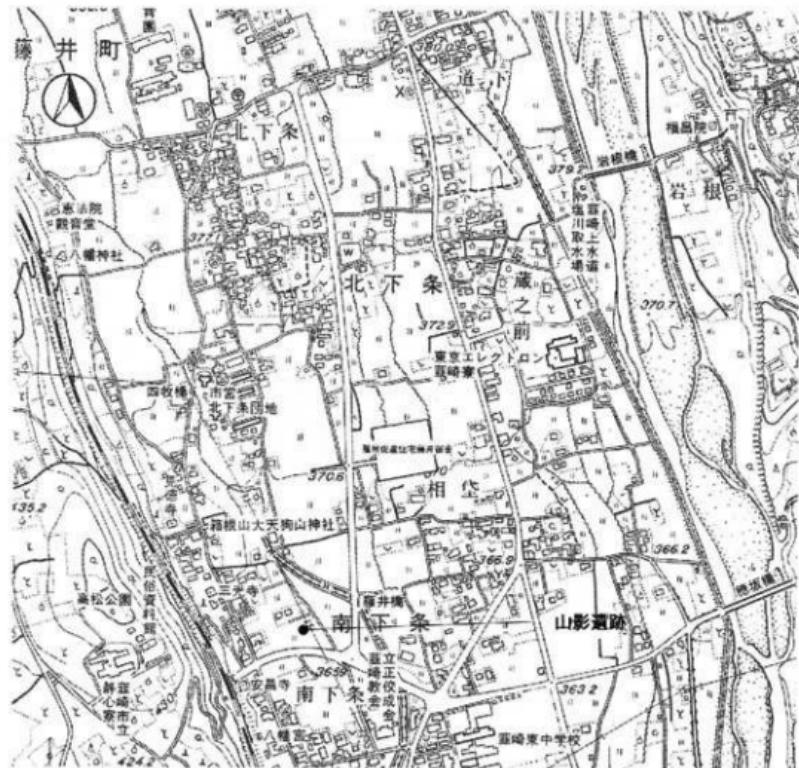
山影遺跡の所在した塩川右岸の氾濫原は、塩川の侵食によって造られた茅ヶ岳山麓の断崖と、七里岩台地東側の片山とに挟まれた低地性の平地となっている。この平地は通称藤井平と呼ばれ、地内を貫流する黒沢川・藤井堰により水利がよく、肥沃で豊かな水田地帯が広がっている。また、『甲斐国志』には「穴山ヨリ南小田川、駒井、坂井、中條、下條、韮崎等ノ敷村ヲ里人藤井ノ庄五千石ト云」と記載があり、古くから穀倉地帯であったことが窺える。当該地帯は一見平坦地の様相を呈しているが、地形を観察してみると、度重なる氾濫によって自然堤防状の微高地が所々に発達していることがわかる。藤井平は、このような微高地上に遺跡が点在しており、山影遺跡は標高約367mの水田下に発見された。

## 2 周辺の遺跡

本遺跡①の周辺にある遺跡としては、縄文時代中期を代表する坂井遺跡②が著名であり、後田遺跡③・北後田遺跡④からは中期曾利Ⅱ～V期の環状集落の一部が発見されている。後田遺跡からは住居のはかに、正位に埋められた曾利Ⅴ期を中心とした12個の深鉢形土器が、方形区画に張

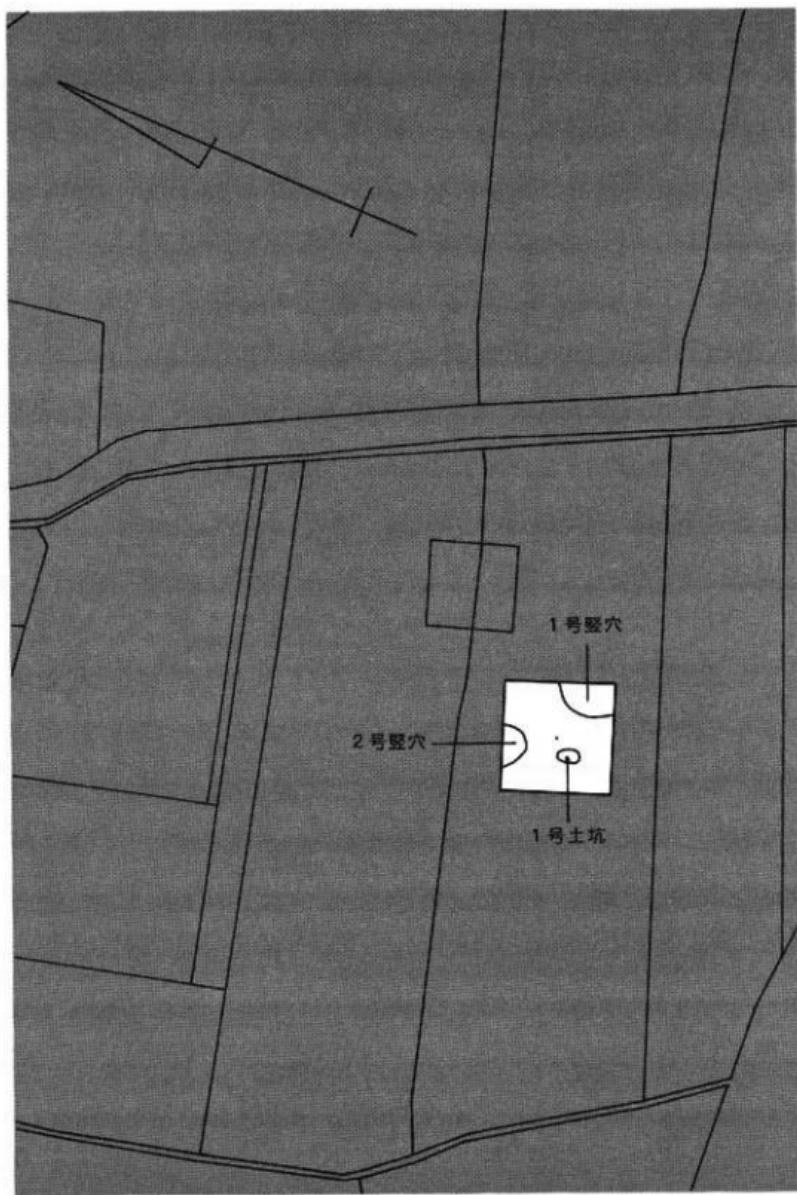


第1図 山影遺跡①と周辺の遺跡(1/25,000)



第2図 山影遺跡位置図(1/10,000)

り出し部分のある特異な形態の配石遺構とともに発見されている。後期になると宮ノ前遺跡⑤で称名寺→堀之内式期の住居址が3軒発見されている。後田遺跡からは堀之内~加曾利B式期の土器とともに長野県上伊那郡辰野町新町温泉遺跡出土土偶に類似した中空土偶が出土している。晩期では宮ノ前遺跡の溝状遺構から土器が多く採集されている。弥生時代には宮ノ前遺跡で、前期の水田跡が発見されている。弥生時代後期では、中田小学校遺跡⑥・北下条遺跡⑦・堂の前遺跡⑧で住居址が発掘されている。つづく古墳時代前期は、住居址98軒、方形周溝墓12基が発見された坂井南遺跡⑨があり、後期になると、坂井堂ノ前遺跡⑩・後田第2遺跡⑪・枇杷塚遺跡⑫があり、後期古墳と思われる火の雨塚古墳⑬が存在する。奈良・平安時代には遺跡数が増え、宮ノ前遺跡・中田小学校遺跡・駒井遺跡⑭・北後田遺跡・前田遺跡⑯・堂の前遺跡などが発掘されており、宮ノ前第2遺跡⑮では集落内寺院が発見されている。



第3図 山影遺跡全体図(1/500)

### III 遺構

調査区域は鉄塔設置区画10m×10mの100m<sup>2</sup>で、遺構としては竪穴2ヶ所、土坑1基が確認された。(第3・4・5図参照)

#### <1号土坑> (第4図)

調査区域中央南西側に位置する。東西1.4m南北2.1m程の規模で、平面形は長椭円形を呈し、確認面からの深さ20cm前後の浅い穴となっている。埋没土は黒褐色で、10cm前後～20cm前後大の河原石が多く入り込んでいた。土坑内からは骨が出土し、それらは黒褐色土中に河原石と混入し散在していたが、頸骨や頭部骨ははっきり確認できた。土器片・黒曜石片が2点づつ出土している。

#### <1号竪穴> (第5図)

区域内南東側に位置する。現場では当初暗褐色土の落ち込みと遺物の出土状態から掘り下げを行い、東端にある長さ60cmの石を炉石と判断し(1号)住居址とした。しかしその後の検討により、非常に浅い竪穴であり堅く踏み締められた土面ではなく床は不明瞭であり、ピットが3ヵ所確認されたが柱穴と断定は出来ない状態であり、炉石とした石の周辺および内側からは焼土あるいは焼成を受けた土・炭化物等が検出されずそこが炉址かどうかわからない、などといった疑問がもたられ、本遺構を住居址とするには否定的な結果となるにいたった。本書では「竪穴」と名称を変更して報告することにしたが、落ち込みは調査区域外へ続いており遺構としての詳細は審らかではない。落ち込みの深さ5cm程で、外周はほぼ炉石とした石を中心に弧状にめぐる。ピットの深さは20～30cm前後となっている。

#### <2号竪穴> (第5図)

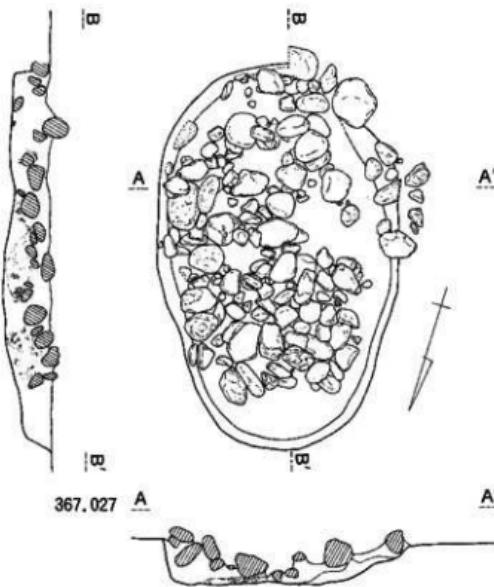
区域内北側に位置する。現場では当初暗褐色土の半円状の落ち込みと遺物の出土状態から掘り下げを行い(2号)住居址とした。しかしその後の検討により、浅い竪穴であり堅く踏み締められた土面ではなく床は不明瞭であり、炉址が確認されない、柱穴がない、などといった疑問がもたられ、本遺構を住居址とするには否定的な結果となるにいたった。本書では「竪穴」と名称を変更して報告することにしたが、落ち込みは調査区域外へ続いており遺構としての詳細は審らかではない。落ち込みの深さ15cm程で、南側に半円状に張り出しており、規模は東西方向で3.5mの長さがある。

### IV 遺物

発掘調査の結果出土した遺物は、時期不明の数点を除くと縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期の土器が主体で、土坑や竪穴などからも出土しているが、大部分は遺構に伴うものではなかった。ほかには、打製石斧や磨石などがみられる。1号土坑の人骨は別項に述べる。

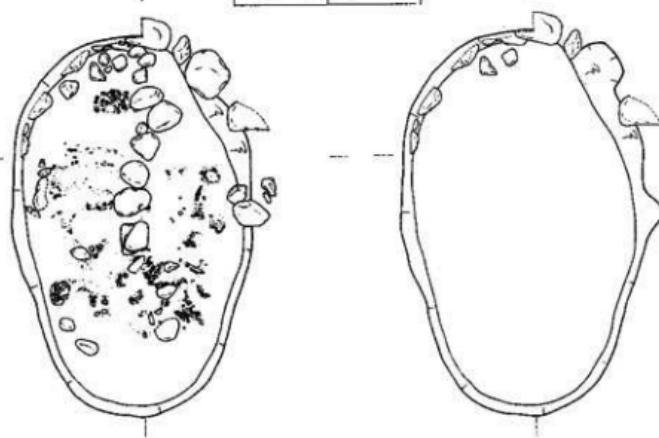
#### <1号土坑出土遺物> (第6図)

1号土坑からは骨のほかに土器片2点、黒曜石製石核状剝片2点が出土している。1は竹管文



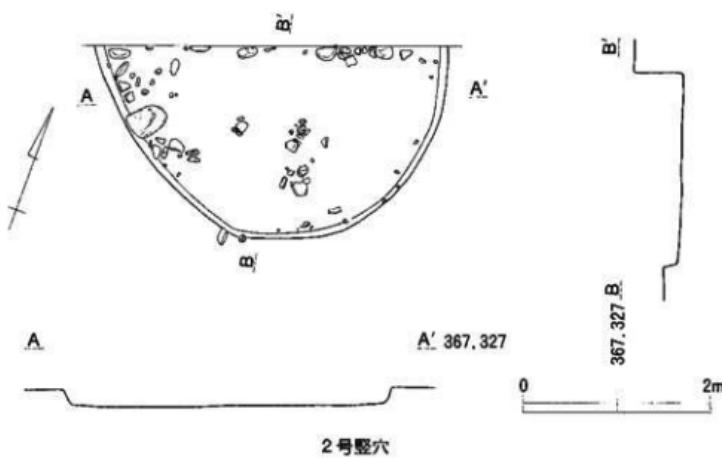
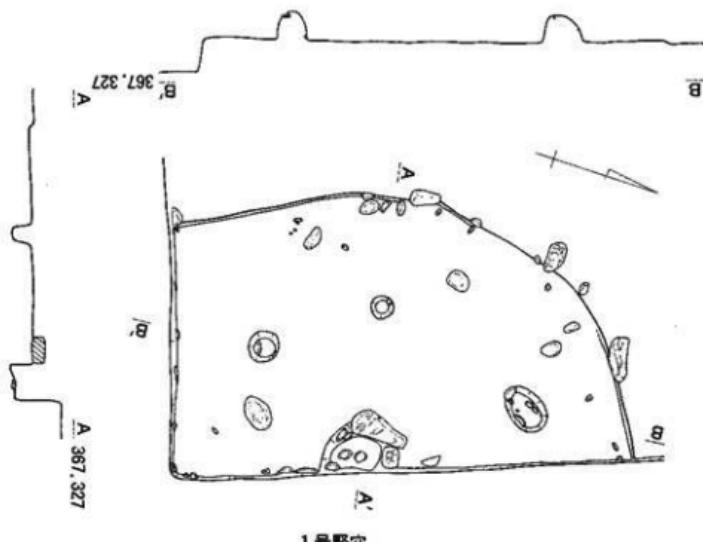
367.027 A

A'

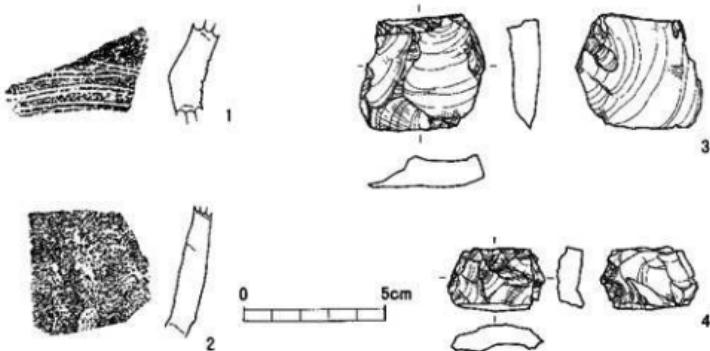


0 1m

第4図 1号土坑平・断面図(1/30)

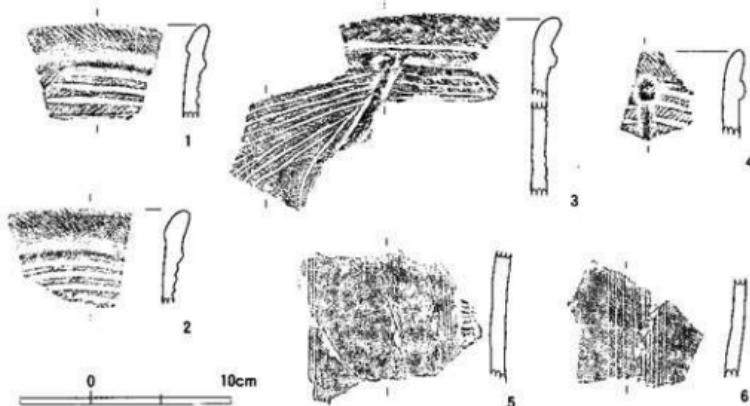


第5図 1号・2号竖穴平・断面図(1/60)



第6図 1号土坑出土土器・黒曜石製石器(1/2)

を数条横走させた文様をもつ深鉢形土器頸部破片で、地文はないようである。時期は前期諸磯式土器の可能性もあるが、周囲の状況から判断して中期初頭の五領ヶ台式土器であろうと思われる。ただし本遺構の時期を示唆するほとんど唯一の資料であるだけに慎重な検討が必要であろう。2は深鉢形土器胴部破片で、表面にはナデ及びヘラ削りが、また内面には横ナデを行っている。詳細な時期は不明。3は大型剝片で、表面には岡上部を打点とする2面の剥離面が、また裏面には本剝片を作った際の剥離面1面がある。剥離面は新鮮で、使用痕はない。重量19g。4も剝片である。やや被熱した黒曜石片を用いて片面を數度にわたり加熱している。重量8.2g。これらの資料が焼骨とのような関連をもっていたのか明らかではないが、単なる混入とも思われる一方、黒曜石の大型剝片の存在は意図的とも思われる。また人骨が焼骨化しているにもかかわらず、遺物には被熱痕が顕著でないことから、燃焼時にはこれらの遺物がなかったと推測できる。



第7図 1号堅穴出土土器(1/4)

<1号竪穴出土土器> (第7図)

出土土器観察表

番号	器種	部位	技法・形態・文様の特徴	胎土	色調		その他
					外面	内面	
1	深鉢	口縁部	R.Lの縦文を地文とし、隆唇と太い沈線がめぐる。	白・黒・赤色粒子を含む	にぶい赤褐色	明赤褐色	
2	深鉢	口縁部	R.Lの縦文を地文とし、隆唇と太い沈線がめぐる。	白・黒・赤色粒子を含む	にぶい赤褐色	にぶい橙色	1と同一個体か?
3	深鉢	口縁部	純文(?)を地文とし、隆唇と太い沈線・太丸棒状工具による沈線が施される。	金雲母を多量に含む	にぶい橙色 一部明褐色	にぶい橙色	
4	深鉢	口縁部	R.Lの縦文を地文とし、太丸棒状工具による沈線が施され円形貼付文が付けられる。	白色粒子、金雲母を含む	明赤褐色、一部にぶい赤褐色	明赤褐色	
5	深鉢	胴部	縦文に平行沈線と隆唇が施される。隆唇上には連續の爪形文が施される。	白色粒子、金雲母を含む	黒褐色	黒褐色	
6	深鉢	胴部	半截竹管による継文の平行沈線。	白・黒色粒子、金雲母を含む	橙色、一部暗褐色	橙色	

<2号竪穴出土土器> (第8図)

出土土器観察表

番号	器種	部位	技法・形態・文様の特徴	胎土	色調		その他
					外面	内面	
1	深鉢	口縁部	口唇下に太い沈線がめぐり、突起が貼付される。沈線から下にはR.Lの縦文を地文とし、Y字文と三角えぐり文が施される。	白色粒子が目立つ砂粒を含む	にぶい赤褐色	にぶい橙色	口径 39.0cm
2	深鉢	頸部	上半はR.Lの縦文を地文とし、するどい沈線文。下半は削り。.	粗い白色粒子、雲母を含む	灰褐色	にぶい褐色	
3	深鉢	頸部	R.Lの縦文を地文とし、するどい沈線文が施される。	白色粒子、金雲母を含む	にぶい黄褐色	橙色	
4	深鉢	口縁部～胴部	R.Lの縦文を地文とし、比較的太い棒状工具による連續弧線文などの沈線文が施される。	白・黒色粒子の立つ粗い砂粒を含む	灰褐色	明赤褐色	
5	深鉢	胴部	R.Lの縦文を地文とし、棒状工具による太い沈線の下に、えぐりが施される。その先から続いた沈線が下垂する。	白色粒子、金雲母を含む	暗赤褐色	暗赤褐色	
6	深鉢	胴部	R.Lの縦文を地文とし、棒状工具による太い沈線の下に、えぐりが施される。その先から続いた沈線が下垂する。	白色粒子、金雲母を含む	暗赤褐色	暗赤褐色	5と同一個体か?
7	深鉢	口縁部	R.Lの縦文を地文とし、口唇面に延繩状工具による比較的浅い沈線の下には竹管による連続押引き文と斜めに走るえぐり文がある。底部には二重の沈線が施される。	大きめの白色粒子、石英と金雲母を含む	褐色	にぶい赤褐色	口径 30.0cm
8	深鉢	胴部	R.Lの縦文を地文とし、太丸棒状工具による沈線文が施される。	白色粒子、金雲母を含む	明褐色	にぶい褐色	
9	深鉢	胴部	L.R.?の縦文をつけた上に、太丸棒状工具による沈線文とえぐり文が施される。	金雲母、砂粒を含む	褐色	にぶい褐色	
10	深鉢	胴部	上位より下位にむかって、半截竹管による連続押引き文、竹管文、交互刺突文、竹管文が施される。	細かい白・黒色粒子、金雲母を含む	黒褐色	褐色	
11	深鉢	胴部	竹管状工具による連続突文と沈線が施され、えぐり文と貼付文も付けられる。縦文は不鮮明。	白色粒子・多量の金雲母を含む	暗褐色	暗褐色	

番号	器種	部位	技法・形態・文様の特徴	胎土	色調		その他
					外面	内面	
12	深鉢	胴部 ～底部	胴部にはハラモキの後、L.Rの縦文が施されている。	金雲母、砂粒を含む	にぶい褐色	にぶい黄褐色	底径 16.8cm
13	深鉢	胴部 ～底部	隆苔上に縦文(R.L)がのる。	金雲母、砂粒を含む	褐色	褐色	底径 14.0cm

<遺構外出土土器> (第9・10・11・12図)

出土土器観察表

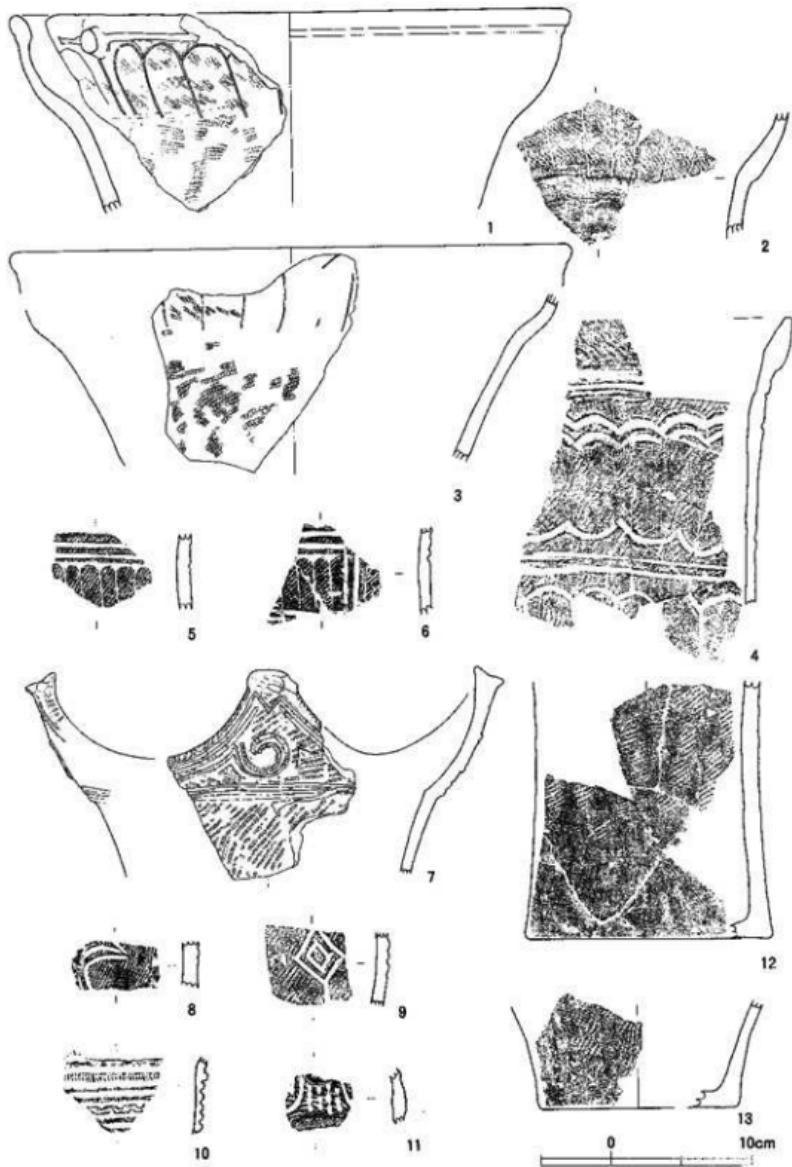
番号	器種	部位	技法・形態・文様の特徴	胎土	色調		その他
					外面	内面	
1	深鉢	口縁部 ～頸部	口縁部には山形突起、交互刺突文、8本の統一向芯線が施され、彫痕は陥没、沈線、沈縫、交互刺突文が施される。	金雲母、石英、砂粒を含む	黒褐色	赤褐色	口径 27.4cm
2	深鉢	口縁部	竹管による沈縫と交互刺突文が横走する。	白色粒子、金雲母を含む	黒褐色	褐色	
3	深鉢	胴 部	半截竹管による沈縫文が施される。	粗い白色粒子、金雲母を含む	褐色	暗褐色	
4	深鉢	口縁部	連続爪形文と竹管によるとみられる沈縫文が横走。	白色粒子、金雲母を含む	褐色	暗褐色	
5	深鉢	胴 部	連続爪形文の施される隆帯と沈縫文がみられる。	金雲母を多量に含む	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
6	深鉢	口縁部	連続爪形文の付けられた隆帯と沈縫が施される。	金雲母、砂粒を含む	暗褐色	明褐色	
7	深鉢	胴 部	半截竹管による交互刺突文と沈縫文、爪形文の付けられた隆帯が施される。	多量の金雲母と粗い砂粒を含む	暗褐色	明褐色	
8	深鉢	胴 部	隆帯、沈縫、交互刺突文、爪形文の付けられた三角形にめぐる隆帯が施される。	白・黒色粒子、金雲母を含む	黒褐色	明褐色	1と同一個体か?
9	深鉢	胴 部	沈縫文が下垂。	白色粒子、金雲母を多量に含む	褐色	灰黄褐色	
10	深鉢	胴 部	連続爪形文の付けられた隆帯と交互刺突文が施される。	金雲母、雲母、白色粒子を含む	明赤褐色	にぶい赤褐色	
11	深鉢	口縁部 ～胴部 ～底部	口縁部は沈縫、横・斜めの沈縫と縦文が施される。側面は爪形文の付けられた隆帯、交互刺突文と沈縫が施され、底部は沈縫文が付ける。底部は沈縫文が施される。L.R.の縦文が施される。	金雲母、石英、砂粒を含む	暗褐色	茶褐色	口径24.6cm 腹高33.4cm 底径12.4cm
12	深鉢	口縁部	上から、縦文、連続爪形文、交互刺突文、竹管文が施される。	金雲母、砂粒を含む	褐色	暗褐色	円筒状
13	深鉢	胴 部	横走する隆帯の下に連続爪形文、交互刺突文、沈縫による斜格子文が施される。	金雲母、砂粒を含む	にぶい褐色	明褐色	
14	深鉢	胴 部	沈縫文の下に斜格子文、交互刺突文が施される。	金雲母、砂粒を含む	褐色	褐色	
15	深鉢	胴 部	L.Rの縦文を地文とし、半截竹管による交互刺突文と沈縫文が施され、突起が付いている。	金雲母、砂粒を含む	明赤褐色	明褐色	
16	深鉢	胴 部	縦文を地文とし、半截竹管による交互刺突文と沈縫文が施される。	細かい金雲母、砂粒を含む	褐色	にぶい褐色	

番号	器種	部位	技法・形態・文様の特徴	胎土	色調		その他
					外面	内面	
17	深鉢	胴部	LR(?)の繩文を地文とし、竹管による沈線文が施される。	白色粒子、雲母を含む	褐色	にぶい褐色	
18	深鉢	胴部	RL(?)の繩文を地文とし、沈線文が入る。	金雲母、砂粒を含む	赤褐色	赤褐色	
19	深鉢	胴部	竹管状工具による沈線文、交互刺突文、斜格子文、同心円文、爪彫文、三角形えぐりが施される。	砂粒を多く含む	にぶい褐色	暗褐色	
20	深鉢	胴部	竹管状工具による沈線文、交互刺突文、斜格子文、爪彫文が施される。	砂粒を多く含む	暗褐色	暗褐色	19と同一個体か?
21	深鉢	胴部	沈線文と、隆帯上には爪彫文が施される。	砂粒、金雲母を含む	にぶい褐色	にぶい褐色	
22	深鉢	胴部	半截竹管による同心円文と沈線文が施される。	細かい白色粒子、雲母を含む	にぶい褐色	にぶい褐色	
23	深鉢	胴部	半截竹管による捲曲文が施される。	細かい白色粒子、雲母を含む	明赤褐色	にぶい褐色	
24	深鉢	胴部	半截竹管と九棒状工具による沈線文が施される。	砂粒、多量の金雲母を含む	明褐色	にぶい褐色	
25	深鉢	口縁部	山形状口縁。竹管文が施される。	砂粒、金雲母を含む	暗赤褐色	極暗赤褐色	
26	深鉢	口縁部	半截竹管による沈線文の上下に連続爪彫文が施される。	砂粒、金雲母を含む	にぶい褐色	黒褐色	
27	深鉢	口縁部	内側に入りこんだ口縁で、沈線と貼付文、刺突文が施される。	白色粒子を含む	褐色	にぶい褐色	曾利式か?
28	深鉢	口縁部	口唇部に瘤状突起があり、新位、横位の沈線文がある。	砂粒、金雲母を含む	暗褐色	灰褐色	
29	深鉢	口縁部	山形状口縁直下に単孔があく。半截竹管による沈線文が施される。	白色粒子、金雲母を含む	赤褐色	明赤褐色	
30	深鉢	口縁部	半截竹管による爪彫文、沈線文が施される。	白色粒子、多量の金雲母を含む	暗赤褐色	暗赤褐色	
31	深鉢	胴部	半截竹管による沈線文が施される。	白色粒子、雲母を含む	にぶい赤褐色	暗赤褐色	
32	深鉢	口縁部	波状口縁唇部に太丸棒による沈線文が施され、区画沈線の間にRLの繩文がみられる。	金雲母、砂粒を含む	褐色	にぶい褐色	
33	深鉢	口縁部	RLの繩文を地文とし、太丸棒による沈線文が施される。	金雲母を含む	暗赤褐色	黒褐色	32と同一個体か?
34	深鉢	口縁部	RLの繩文を地文とし、太丸棒による沈線文、交互刺突文が施される。	白色粒子、金雲母を含む	黒褐色	灰褐色	
35	深鉢	口縁部	RLの繩文を地文とし、太丸棒による沈線文、交互刺突文が施され、三角形えぐりがみられる。	白色粒子、雲母を含む	明褐色	明褐色	
36	深鉢	口縁部	太丸棒による交互刺突文、沈線文、三角形えぐりが施され、隆帯には繩文がみられる。	金雲母、白色粒子を含む	橙色	にぶい黄褐色	

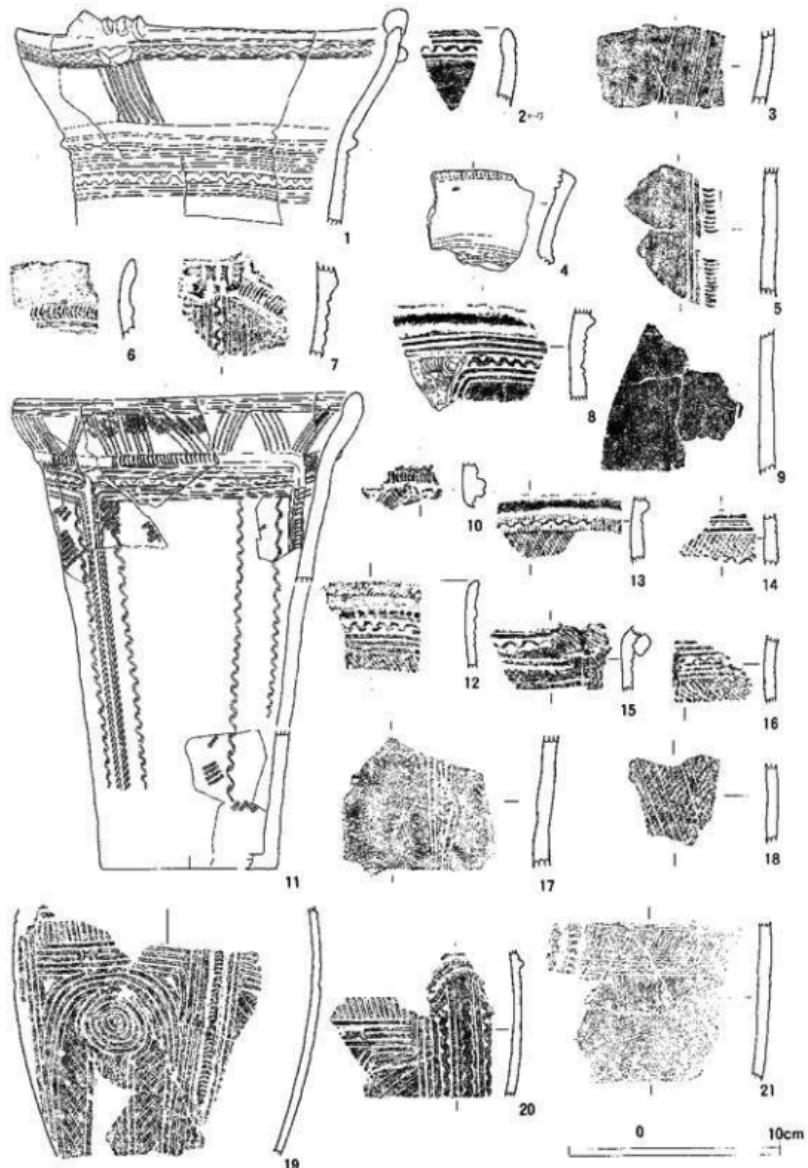
番号	器種	部位	技法・形態・文様の特徴	胎土	色調		その他
					外面	内面	
37	深鉢	口縁部 ～胴部	R.Lの繩文を地文とし、太丸棒による沈線文、交叉斜突文が施される。隆線上にはR.Lの繩文が施される。	金雲母、白・黒色粒子を含む	黒褐色	にぶい褐色	
38	深鉢	口縁部	太丸棒による沈線文、玉抱三叉文が施される。口容部にはR.Lの繩文。	金雲母、白色粒子を含む	にぶい褐色	にぶい褐色	
39	深鉢	口縁部	R.Lの繩文、隆蒂、太丸棒による沈線文と交叉斜突文が施される。	金雲母、砂粒を含む	明褐色	灰黄褐色	
40	深鉢	口縁部	R.Lの繩文を地文とし、太丸棒による沈線文、斜突文が施されている。	金雲母、砂粒を含む	明褐色	にぶい褐色	
41	深鉢	口縁部	隆蒂とえぐり、太丸棒による沈線文、渦巻文が施される。	金雲母、白・黒色粒子を含む	明赤褐色	明赤褐色	
42	深鉢	口縁部	R.Lの繩文を地文とし、太い沈線文が横走する。口容部には突起がみられる。	金雲母、白色粒子を含む	明褐色	褐色、一部黒変	
43	深鉢	口縁部	口特部には突起、R.Lの繩文と横走する沈線文が施される。	金雲母を多く含む	褐色	にぶい褐色	
44	深鉢	口縁部	R.L ? の繩文を地文とし、Y字状のするどい沈線の中にえぐり文を施している。	砂粒を含む	暗赤灰色	極暗赤褐色	
45	深鉢	胴部	R.Lの繩文、結節繩文を地文とし、太い棒状工具による沈線文が施され、垂下する隆蒂上にも繩文がみられる。	金雲母、石英、多量の砂粒を含む	暗褐色	暗褐色	
46	深鉢	胴部	L.Rの結節繩文を地文とし、太丸棒による沈線文、円形容の隆線文が施される。	白・黒色粒子、金雲母を多量に含む	褐色	明褐色	
47	深鉢	胴部	R.Lの繩文を地文とし、太丸棒による沈線文が施される。隆蒂上には繩文が施される。	金雲母、白色粒子を含む	明赤褐色	明赤褐色	37と同じ個体か?
48	深鉢	胴部	R.L結節繩文を地文とし、太丸棒による沈線文が施される。	金雲母、白色粒子を含む	暗褐色	褐色	
49	深鉢	胴部	R.L結節繩文を地文とし、太丸棒による沈線文と、隆線が施される。	赤・白色粒子、石英を含む	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	
50	深鉢	胴部	R.L結節繩文を地文とし、繩文の付けられた隆蒂と沈線が横走する。	白色粒子、金雲母を含む	明赤褐色	橙色	
51	深鉢	胴部	R.L ? の繩文を地文とし、太丸棒による沈線文が施される。	金雲母を含む	褐色	にぶい褐色	
52	深鉢	胴部	繩文を地文とし、太い沈線文が施される。	白色粒子、少量の雲母を含む	暗褐色	暗褐色	
53	深鉢	胴部	R.Lの繩文を地文とし、太い沈線文が施される。	金雲母、白色粒子を含む	褐色	褐色	
54	深鉢	胴部	R.Lの繩文を地文とし、太丸棒による沈線文と隆線文が施される。	雲母と白の目立つ砂粒を含む	明赤褐色	明褐色	
55	深鉢	胴部	L.R ? の繩文を地文とし、沈線文が施される。	雲母、赤・白色粒子を含む	にぶい赤褐色	暗赤褐色	
56	深鉢	胴部	R.Lの繩文を地文とし、太い沈線文が施される。	金雲母、白色粒子を含む	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	

番号	器種	部位	技法・形態・文様の特徴	胎土	色調		その他
					外面	内面	
57	深鉢	胴部	R.Lの縄文を地文とし、沈線文と縄文の付けられる隆脊が施される。	金雲母、白色粒子を含む	橙色	橙色	
58	深鉢	胴部	R.Lの縄文を地文とし、太い沈線が横走する。	金雲母、砂粒を含む	暗赤褐色	灰褐色	
59	深鉢	胴部～底部	R.Lの縄文を地文とし、丸い太い沈線と隆帯が垂下する。	白色粒子、金雲母を含む	明赤褐色	灰褐色	
60	深鉢	口縁部	太丸棒による沈線文と三角えぐり文が施される。	白色粒子、多量の金雲母を含む	黄褐色	明褐色	
61	深鉢	胴部	太丸棒による沈線文が施される。	粗い金雲母を多量に含む	暗赤褐色	にぶい赤褐色	
62	深鉢	底部	沈線文が施される。	金雲母、砂粒を含む	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	底径 12.0cm
63	深鉢	口縁部	沈線文、隆脊上に連続爪形文、口唇部に沈線文が施される。	金雲母、砂粒を含む	灰褐色	にぶい赤褐色	
64	深鉢	胴部	縄文が施される。	白色粒子を含む	赤褐色	黒褐色	
65	深鉢	胴部	R.Lの縄文が施される。	白色粒子、金雲母を含む	明赤褐色	にぶい赤褐色	
66	深鉢	胴部	R.L、結節縄文を地文とし、縄文がかかった隆脊が垂下する。	白色粒子、金雲母を含む	褐色	褐色	
67	深鉢	胴部	R.L、結節縄文が施される。	白色粒子、金雲母を含む	褐色	褐色	
68	深鉢	胴部～底部	R.Lの縄文を地文とし、縄文がかかった隆脊が垂下する。	白色粒子、金雲母を含む	褐色	暗褐色	底径 13.6cm
69	深鉢	底部	R.L結節縄文と隆脊がみられる。	白色粒子、金雲母を含む	明褐色	黒褐色	底径 18.0cm
70	深鉢	胴部～底部	R.Lの縄文が施される。	白色粒子、金雲母を含む	赤褐色	黒色	底径 15.0cm
71	深鉢	底部	R.Lの縄文が施される。	金雲母、砂粒を含む	赤褐色	赤褐色	底径 11.4cm
72	浅鉢	口縁部～胴部	口縁部内面に半截竹管による油焼押し引き文が施され、他の単位文的構成文、交互網突文が施される。穿孔がある。	粗い白・黒色粒子、金雲母を含む	橙色	橙色	口径 46.0cm
73	浅鉢	口縁部	内面に沈線文、連続押し引き文、三角形えぐり文が施される。	金雲母、砂粒を含む	赤褐色	明褐色	
74	浅鉢	口縁部	内面に連続押し引き文、交互刺突文が施される。	金雲母、砂粒を含む	赤褐色	赤褐色	
75	浅鉢	口縁部	内面に連続押し引き文、交互刺突文、三角形えぐり文が施される。	白色粒子、金雲母を含む	橙色	明赤褐色	
76	浅鉢	口縁部	内面に連続押し引き文と、R.Lの縄文がる隆脊が施される。	金雲母、砂粒を含む	暗褐色	暗褐色	

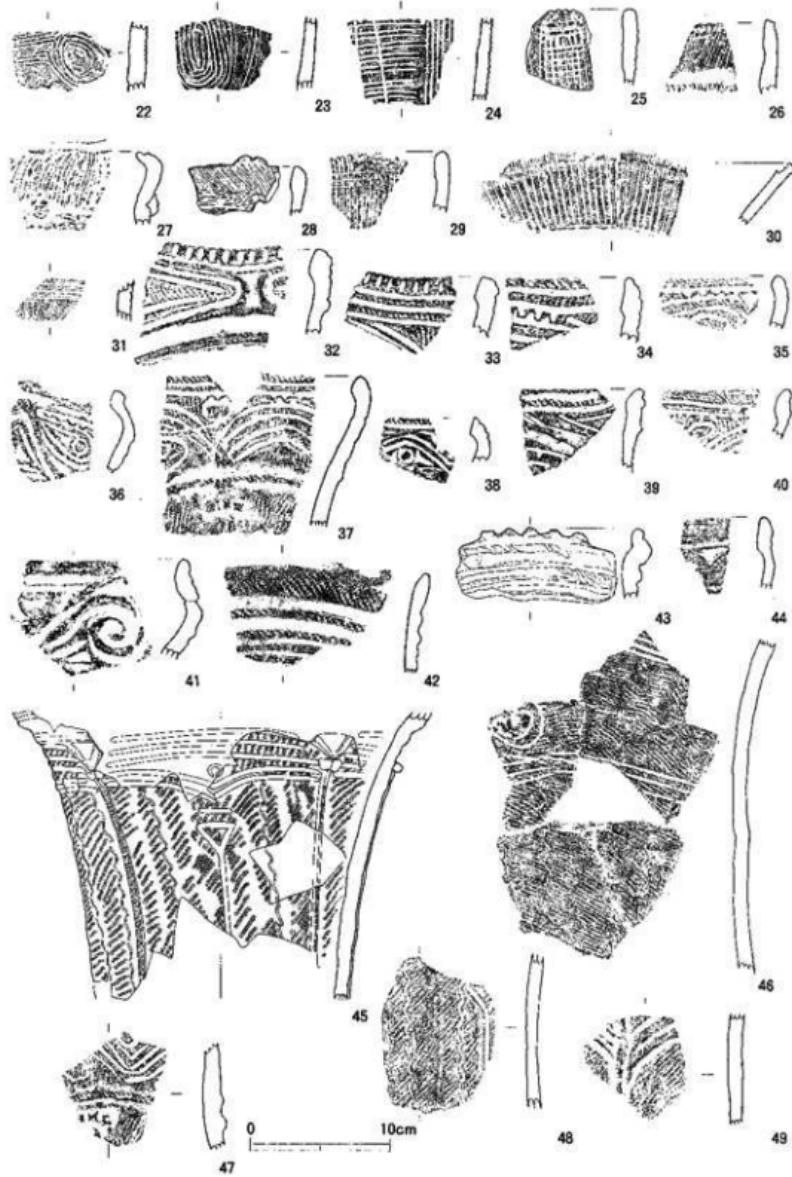
番号	器種	部位	技法・形態・文様の特徴	胎土	色調		その他
					外面	内面	
77	浅鉢	口縁部～胴部	内面に連続押し引き文が4列施される。	白色粒子、金雲母を含む	橙色	明赤褐色	
78	浅鉢	口縁部	口唇部には爪形文。内面に連続押し引き文、外面には沈線文と網文が施される。	雲母、白色粒子を含む	にぶい褐色	にぶい褐色	
79	浅鉢	口縁部	内面に巾のせまい竹管文が4列施される。	少量の金雲母、砂粒を含む	褐色	褐色	
80	浅鉢	口縁部	内面に連続押し引き文と交互刺突文が施される。	金雲母、砂粒を含む	褐色	赤褐色	
81	浅鉢	口縁部	口唇部に沈線文。内面には連続押し引き文。外面には、沈線文が曳走し、R L ? の網文が施される。	雲母、砂粒を含む	褐色	暗褐色	
82	浅鉢	口縁部	口唇部に沈線文。内面には連続押し引き文と交互刺突文が施される。	金雲母、砂粒を含む	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
83	浅鉢	口縁部	内面に3列の連続押し引き文が施される。	金雲母、白色粒子を含む	明赤褐色	赤褐色	
84	浅鉢	口縁部	内面は連続押し引き文、外面には爪形文、竹管文がみられる。	金雲母、白色粒子を含む	明褐色	にぶい褐色	
85	浅鉢	口縁部	口唇部に爪形文。内面は連続押し引き文、外面には沈線文が施される。	金雲母、黒色粒子を含む	明赤褐色	赤褐色	
86	浅鉢	口縁部	内面に5列の連続押し引き文が施される。	金雲母、砂粒を含む	暗赤褐色	暗赤褐色	
87	浅鉢	口縁部	内面にR L ? の網文が施されている。	金雲母、白色粒子を含む	赤褐色	赤褐色	
88	浅鉢	口縁部	外側にR L ? の網文と連続押し引き文が施される。	金雲母、砂粒を含む	にぶい赤褐色	明赤褐色	
89	浅鉢	口縁部	口唇部に2列の爪形文が施される。	金雲母、白色粒子を含む	黒褐色	暗赤灰色	
90	浅鉢	口縁部	口唇部に又しの網文。外側に交互刺突文と爪形文が施される。	金雲母、砂粒を含む	明赤褐色	にぶい赤褐色	
91	浅鉢	口縁部	外側に網文と半截竹管文がみられる。	金雲母、白色粒子を含む	褐色	褐色	
92	浅鉢	底部		金雲母、砂粒を含む	褐色	褐色	底径 10.0cm



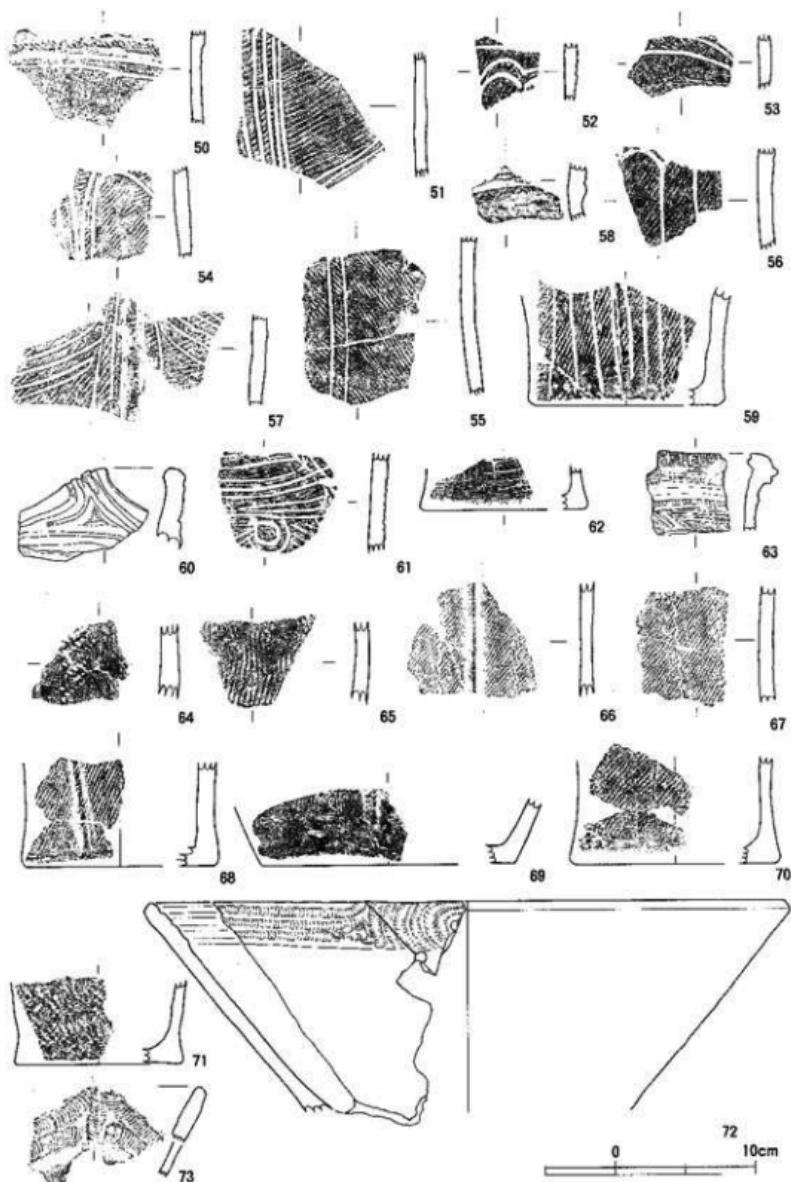
第8図 2号整穴出土土器(1/4)



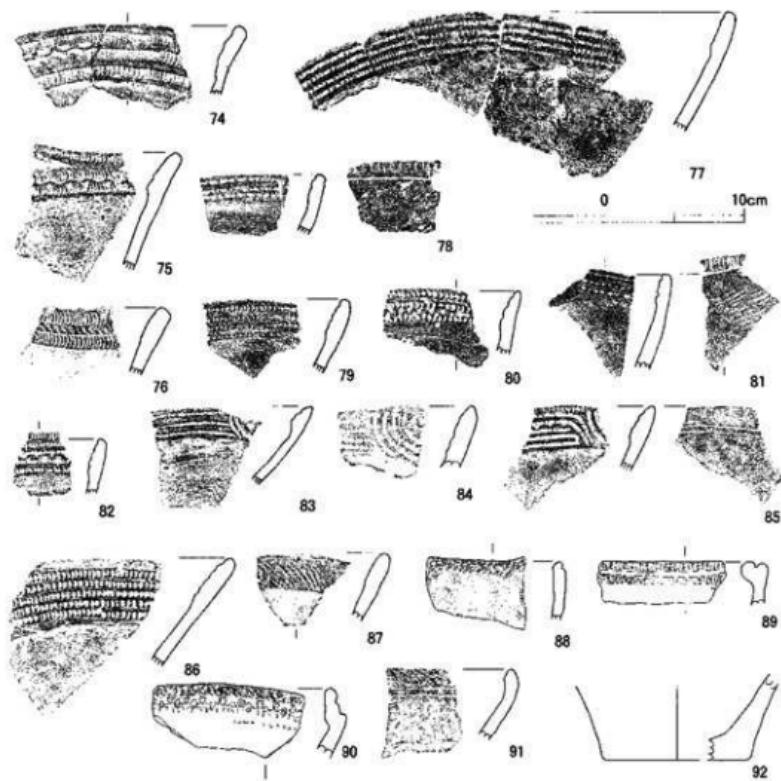
第9図 遺構外出土土器(1/4)



第10図 遺構外出土土器(1/4)



第11図 遺構外出土土器(1/4)



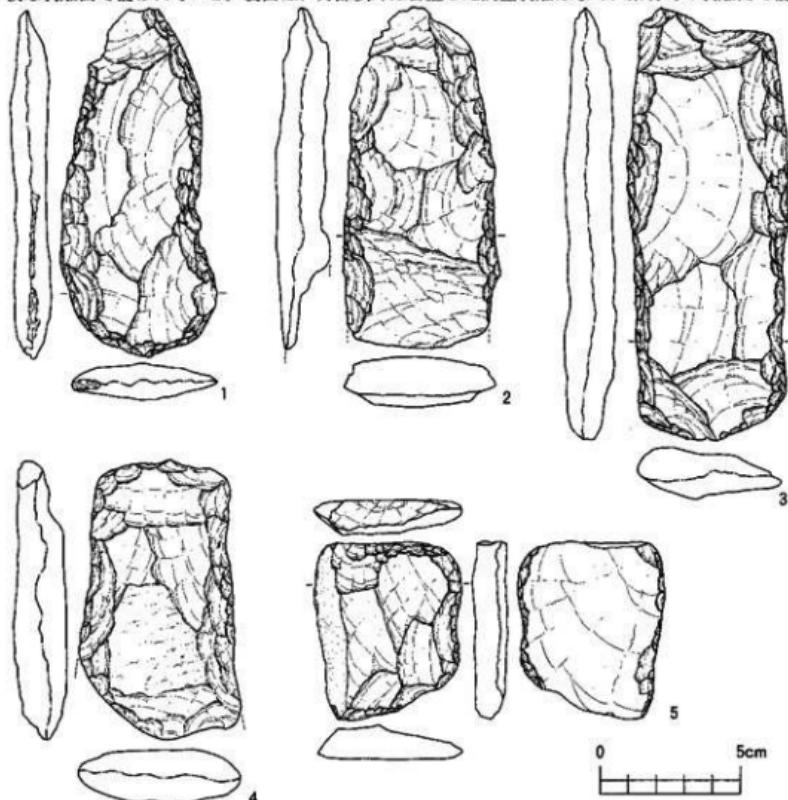
第12図 遺構外出土土器(1/4)

## V 山影遺跡出土の石器について

今回の調査地域から出土した石器は以下のとおりである。打製石斧14点、横刃形石器2点、二次加工のある剝片1点、礫器1点、櫻形石器1点、クボミ石1点、棒状のスリ石1点の21点である。この他、黒曜石剝片24点、黒曜石石核5点、その他の石材の剝片8点、打斧の調整剝片8点の45点である。総点数66点であるが、この中に縄文時代遺跡で一般的に出土する石鏃や石匙が含まれていない点注意を要す。以下、各遺構ごとに、詳述する。

### <1号堅穴>

打製石斧1点と安山岩剝片1点の2点のみ出土した。第13図1が本遺構出土の打製石斧である。黒灰色粘板岩製のバチ形で、周縁部に小規模な調整を行っているものの大半の面が素材時の大規模な剝離面で覆われている。裏面は、刃部以外は目立った調整剝離ではなく、素材時の剝離面で覆



第13図 石器①(1号堅穴・2号堅穴出土石器, 1/2)

われ、基部には一部円礫面も残存している。図正面左下方部に刃部の磨耗がみられる。安山岩剥片は図示しなかったが、付近の転石を剥離したと思われる、一般的に利器には利用しない石材の剥片である。

#### <2号堅穴>

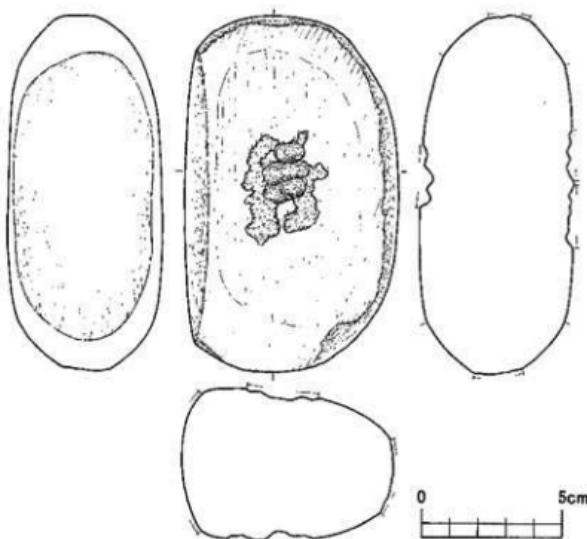
打製石斧3点(第13図2~4)、二次加工のある剥片1点(第13図5)、クボミ石1点(第14図)、黒曜石剥片13点、黒曜石核3点、珪質頁岩剥片1点、砂岩大型剥片1点、流紋岩大型剥片1点、打斧の調整剥片3点の27点である。

第13図2は、黒灰色の地に灰白色のシマが多く入るホルンフェルス製のバチ形で、基部と刃部以外に深く調整が成されている。刃部は折れ面であり、折れの後に図正面左縁部に調整を行って再使用したものと思われる。裏面は刃部から身中央付近まで円礫面が広く見られる、第13図3は、暗灰色で白いスジの入る砂岩製の大型の短冊形で、中央やや基部よりもやや胴張りになる点特徴的である。基部端に裏面から急斜で深い剥離が1回成され、抉るような面を形成している。裏面も大規模な素材時の剥離面と深い調整剥離面で覆われている。第13図4は、白灰色結晶片岩製のバチ形で、刃部が図正面左側にかたむく。裏面刃部に深い大規模な剥離があり、折れた刃部を再生し再使用したものと思われる。図正面中央に広く円礫面が残る。

第13図5は、粒子が粗い黒色砂岩製の二次加工のある剥片である。素材背面左縁部に円礫面を残す。石面上の剥離は打面ではなく、主剥離面形成後に腹面を打面に剥離されたもので、この面を打面に背面側に調整が見られる。背面の二次加工は左縁を除く縁部に、腹面の二次加工は左右

両縁部に成され、いずれも浅く小規模である。

第14図は安山岩円礫を利用したと思われるクボミ石で、スリ石、タタキ石を兼用している。円礫周縁の敲打面、図正面左の粗いスリ面、表裏面の鏡面状のスリ面の3面で構成され、鏡面状のスリ面中央にクボミがみられる。敲打面は図正面上下で幅が狭く、鏡面状のスリ面で磨り取られているように見える。粗いスリ面は非常に整った凸面を成すが、表面はザラザラ



第14図 石器②(2号堅穴出土石器, 1/2)

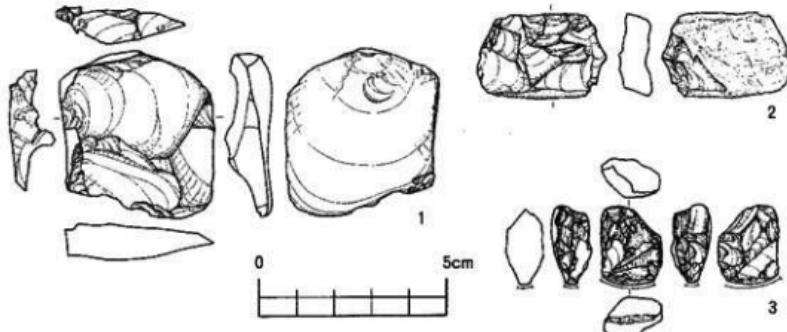
の粗い面である。図正面下の断面図に見るように、鏡面状のスリ面がこの面にまわり込んでおり、鏡面状のスリ面より古い可能性がある。鏡面状のスリ面は二つの部分からなり、クボミ面を取り囲む比較的平坦な面と、敲打面側に大きく傾斜する面とから成る。図の裏面の鏡面状のスリ面は、正面と較べあまり顕著ではないが、同様な面構成である。クボミ面は、図正面側が深い。3つのクボミがあるが上端は浅い。クボミ周辺に非常に凹凸の激しい敲打面がみられ、鏡面状のスリ面形成以前にこの敲打面が覆っていた可能性が考えられる。

#### <1号土坑>

黒曜石大型剝片1点(第15図1)、黒曜石石核1点(第15図2)の2点が出土した。

第15図1は、黒色のシマが多く入る半透明の黒曜石である。打面は背面側と図正面左縁の旧打面側からの剥離が直交し、背面は旧打面側と先述の旧打面側からの剥離が直交する。おそらくサイコロ状の石核であったと思われる。両打面にはパンチ痕が残存する。また、主剥離面の打点にはリップが発達し、角などやわらかい材質の打撃具が用いられている可能性がある。縁部に若干の不連続な微細剥離があり、使用痕である可能性がある。

第15図2は、シマが不明瞭な半透明の黒曜石である。背面及び上下左右が自然面で覆われている。自然面は岩脈中で生じた古い剥離面であり光沢がなく、スリガラス状に風化している。作業面は、図正面上方と左右面側から剥離が成され、いずれも自然面を打面とする。図裏面左側に見られる剥離は下方からの剥離であるが、剥片を得た剥離ではなく、台石上での二次的な剥離と思われる。

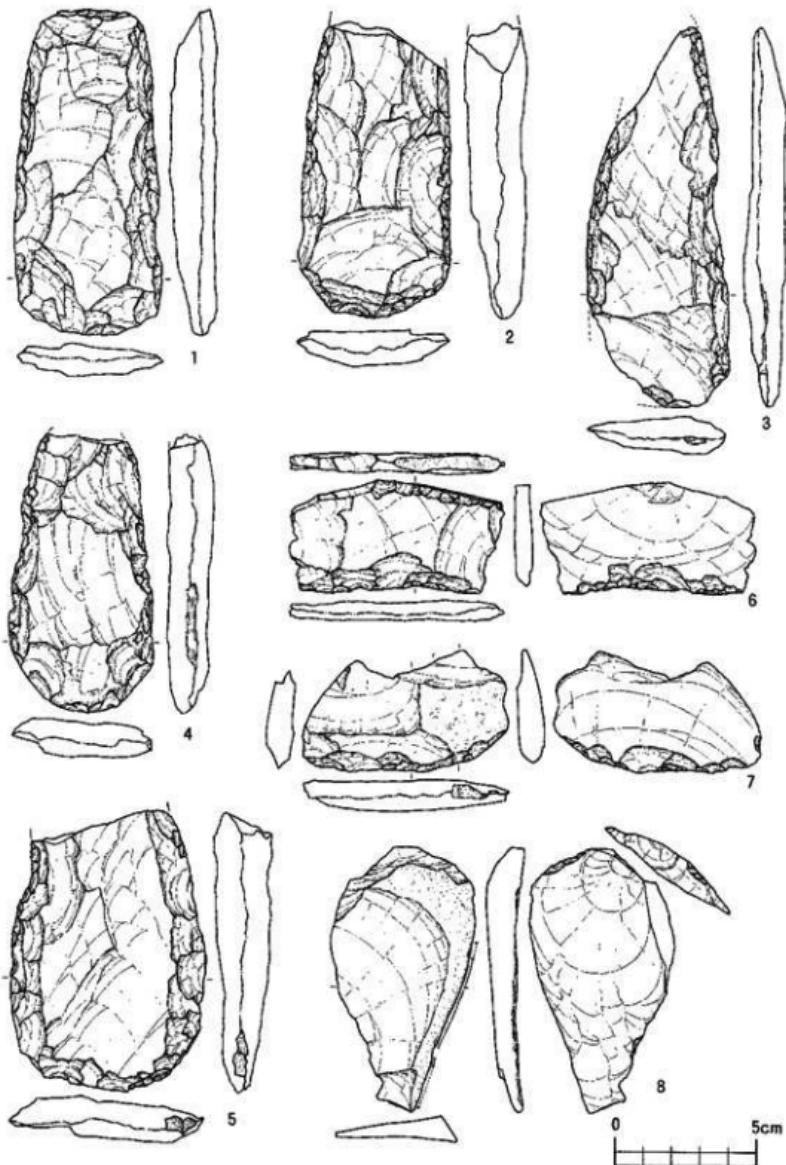


第15図 石器③(1号土坑・遺構外出土石器, 2/3)

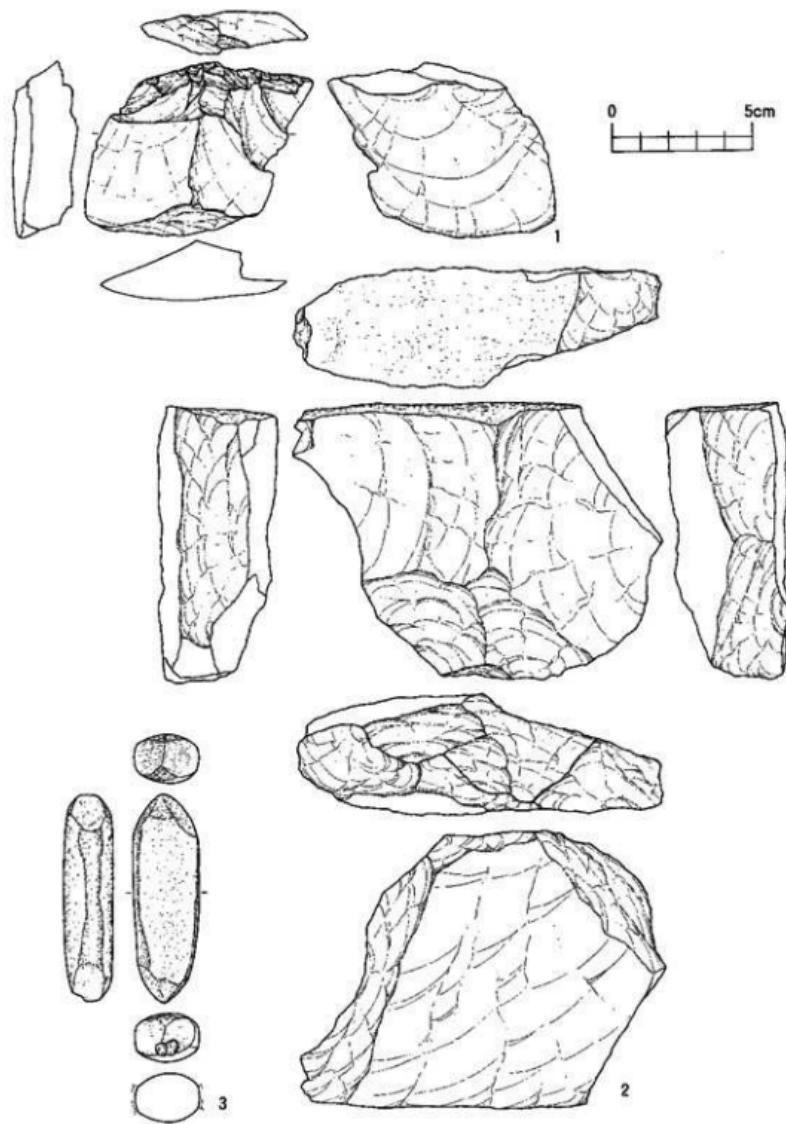
#### <遺構外>

楔形石器1点、打製石斧10点、横刃形石器2点、礫器1点、棒状のスリ石1点、黒曜石剝片10点、黒曜石石核2点、粘板岩大型剝片2点、砂岩大型剝片2点、打製石斧の調整剝片5点の合計36点である。

第15図3は、透明な黒曜石製の楔形石器である。図下部に、最大幅2.5mmほどのスリガラス状の磨耗面があり注目される。磨耗面の周囲には、微小剥離や察痕等はまったく見られない。し



第16図 石器④(遺構外出土石器, 1/2)



第17図 石器⑤(遺構外出土石器, 1/2)

たがって機能対象は、V字状の溝ではなく、開いた面で、比較的やわらかいものであった可能性がある。

第16図1～5は、打製石斧である。1、3～5が黒色粘板岩製、2が白色ツブ入りの茶灰色粘板岩製である。1は完形品で、他は基部を欠損している。2の裏面右半部と4の裏面右基部側、5の刃部右側に円礫面を残す。

第16図6、7は、いわゆる横刃形石器である。6は、黒色粘板岩の横長剝片を利用している。刃部は凹刃で、両面に調整が見られる。素材打面に円礫面が残り、円礫面から細かな剥離が成されているが、素材時の古い剥離と思われる。磨耗等は見られない。

第16図7は、黒灰色粘板岩製の横刃形石器で、刃部は凸刃で、両面に調整がある。背面に広く円礫面が残る。図正面右刃縁部が著しく磨耗し、刃が丸くなっている。腹面刃部のうち、中央より右側のものは、調整剥離の中で最も新しく、磨耗を伴っておらず、あるいは、打製石斧の調整剝片を再利用したものとの可能性がある。この場合、先述の腹面の新しい剥離以外は、磨耗も含めて打製石斧の剥離や磨耗と考えられる。

第16図8は、黒色粘板岩製の大型剝片である。背面右縁側に円礫面を残す。背面左刃縁には刃部の磨耗が見られ、磨耗面の背面側のみに微小剥離が連続する。磨耗刃縁は直線的ではなく起伏がかなりある。このことから、機能対象は比較的やわらかいもので、腹面側から背面側に向かって刃部に直交する方向で作用させた可能性が考えられる。

第17図1は、黒色粘板岩製の大型剝片である。剥離は全て、主剥離面の打面から成されている。打面端部には頭部調整風の細かな剥離が連続する。打面の剥離は、背面側から成されており、ショッピング・トゥール状の縁郭を持つ石核であったことが推定される。剝片端部はヒンジフラクチャーとなっている。明瞭な使用痕は見られない。

第17図2は、白色ツブ入り灰色ホルンフェルス製の穀器である。図正面上に広く円礫面を残し分厚い板状の大型剝片を素材としている。

第17図3は、褐色砂岩製の棒状のスリ石である。両端に大きい二つの面からなる平坦な粗いスリ面が向かい合い、中央に稜を形成している。上下の稜の方向は異なり、重ねるとX字状になる。稜細の端部には敲打面があり、図上では4面、図下では3面構成となる。図下では稜線上の一部に剥離痕がみられる。図正面左右両面に長軸方向に敲打痕がみられる。

## VI 山影遺跡の五領ヶ台式土器について

### (1) 土器の分類

山影遺跡からの出土土器は、時期不明な数点を除き、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器のみである。出土状況によれば五領ヶ台式期の堅穴2基のほか、遺構外からは狭い面積の調査にもかかわらず多量の当該期の土器を検出しており、短期間に形成された土器捨て場のような状況である。それらの土器は時期的にまとまりがあり、土器研究上良好なあり方を示していると思う。ここでは本遺跡の土器をいくつかの観点から分類し、その項目に従って遺構および遺構外出土土器の説明を行いたい。分類に際しては、施文技法、文様で細分し、器形、主要文様で大別する。

#### ①器形

##### 器形 I - 1 キャリバー状に開き、口縁部文様帯をもつ深鉢形土器

口縁部と胴部の境が横位の隆帶(線)で区画されるもの(1-1、第9図1・11など)と、肥厚した胴部から口縁部へと移行するもの(1-2、第8図1・3など)がある。前者では口縁部・胴部の文様帯が分離し全体に装飾的であり、後者では口縁部に連続したY字文をもち、全面に縄文を施文する一群の土器に特徴的で、口縁部は丸く内湾する。口縁は平縁、波状の両者がある。

##### 器形 I - 2 円筒状で口縁が弱く開き、口縁部に短い縄文帯をもつ深鉢形土器

1号堅穴1~4や、2号堅穴4があるが、量的には少ない。胴部以下は沈線文(技法e)、陸線文(技法j)により全体的に施文を行い、口縁部は平縁である。

##### 器形 I - 3 胴部が弱く内湾し、屈曲して強く開いた口縁部がるる深鉢形土器

竹管文を多用した土器(第9図19など)で、口縁部文様帯と胴部文様帯に分かれ、さまざまな技法・文様を駆使して装飾を過多に行う。胴部には渦巻き文や縦位の斜格子文を用い、大柄なモチーフを描いている。

#### 器形 II 鉢形土器

器形は単純にハの字状に広がる鉢(浅鉢)形であり(第11・12図73~91)、器壁傾斜の緩いものと、直立近く立つきついものがあるが、破片資料が多くよくわからない。文様は口縁部内面の横位帯状の部分と、外面に施文し、内面に技法cによる半截竹管文を施した例が主体的である。半截竹管文には幅広のものと狭いものの二者があるが、描かれる文様は同じ種類のものである。

#### ②技法

##### 技法 a (半截竹管文による平行沈線文)

竹管を半截したと思われる施文具で半截面(腹面)を器面に向けて引き、平行した2本の沈線文を描き、文様1~3などを施文する。

##### 技法 b (半截竹管文による連続押し引き文)

主に縦線上において腹面を縦線に向けて、連続的に細かく押し引きする。胴部の縦位に垂下する施文例、口縁部と胴部の間の横位施文例、口唇部の横位施文例などがある。

#### 技法c(半截竹管文による連続押し引き沈線文)

半截面の反対側(背面)を器面に向けて、連続的に細かく押し引きする。主に鉢形土器の口縁内面に横位に数条施文し、単位文的に渦巻き文などを描いている。深鉢形土器では口縁部に横位に施文する例、口縁部文様帶の施文例がわずかに存在する程度であるが、五領ヶ台式直後の猪口式土器には特徴的な技法となっており、深鉢形土器においては新しい技法であろう。

#### 技法d(半截竹管文による交互刺突文)

背面で交互刺突しており、深鉢形・鉢形土器とともに、竹管文施文の土器であれば普通に見られる技法である。口縁部や脇部に、横位・縦位に、また部分的に施文しており、同一個体の土器にあっては、ほかの竹管文と同一施文具を用いて描いたものと思われる。また厳密には交互刺突ではないが、交互刺突的な効果をねらって竹管文を小刻みに蛇行させた文様もある。

#### 技法e(棒状工具による沈線文)

深鉢形土器に見られる施文例で、太いものと細いものがある。竹管状の施文具の可能性があり、半截竹管とは同一素材であるかもしれない。

#### 技法f(棒状工具による交互刺突文)

口縁部文様帶などに横位に、または部分的に見られる技法で、技法dに較べると出現頻度は低いと思われる。

#### 技法g(三角えぐり文)

半截竹管・棒状工具施文の両者に見られる技法であるが、前者ではわずかに存在し、後者のとくにY字文にともなって施文されている。また渦巻き文と曲線文がつくる小さな隙間に施文する場合があり、後の「玉抱き三叉文」につながるようなモチーフもある。

#### 技法h(縄文)

深鉢形土器では半截竹管・棒状工具施文の両者にみられ、また鉢形土器では外面および口縁部内面に施文する。単節縄文(RL)が多く、LRや無節縄文と思われるものも少数存在する。

#### 技法i(結節縄文)

深鉢形土器脇部に縦位に施文するもので、縄文施文の後に結節縄文をあらためて施文した例が多いと思われる。

#### 技法j(隆帯文・隆線文)

主に深鉢形土器に施文するもので、技法bでは連続押し引き文とセットで用いる。また縄文施文土器では、隆線文上にも縄文を施文する例がある。無文の隆線も少数存在する。

#### 技法k(貼付文)

単位文の起点となるような位置に円形、あるいは短い棒状などを貼付したもの。

#### ③文様構成

##### 文様1(集合沈線文)

主に半截竹管で平行沈線を連続して区画内に充填したもので、技法aによる文様効果のひとつである。

### 文様2(斜格子文)

主に半截竹管により斜格子文を区画内に描いたもので、技法aによる文様効果のひとつであり、また文様1の変形といえる。主に深鉢形土器胴部に縦位に展開し、後の中期中葉にかけて多く出現する縦位区画文土器の系譜にある土器文様といえる。

### 文様3(同心円・渦巻き文)

深鉢形土器I-3の胴部や口縁部、鉢形土器口縁部内面などに施文し、技法a～cを用いる。鉢形土器では技法cにより単位的に施文するが、通常、上端あるいは下端を欠いた半円弧文となっている。

### 文様4(Y字文)

深鉢形土器I-1の口縁部や、I-2の胴部などに横位に連続して見られる文様で、沈線文(技法e)のみの場合、沈線文とえぐり文との併用の場合(技法e+g)がある。また単独で胴部に施文することもあり、Y字の頭が菱形に変形したものもある。棒状工具は細く鋭い感じのものが多く、竹管文を使用した例は本遺跡には見られない。

### 文様5(連続弧線文)

深鉢形土器I-2の胴部にある文様で、上向き、下向きの両者があり、太い棒状工具を用いている。

#### ④土器の大別(器形別に分類)

##### 深鉢形土器1類(竹管文+無文地文)

器形は深鉢形土器I-1・2で、技法a・b・d・j、文様1がみられる(第9図1など)。同一個体に技法a・dを併用する場合、同一竹管文での施文のようであり、幅4～6mmと細い原体である。対して技法bは幅1cm程度と太い。口縁部・胴部文様帯境には技法jによる隆帯がある。

##### 深鉢形土器2類(竹管文+繩文地文)

器形は深鉢形土器I-1・2があり、技法a・b・d・i・j・k、文様1・2がある(第9図11など)。

##### 深鉢形土器3類(竹管文充填)

器形は深鉢形土器IIIで、技法a・b・d・g、文様1・2・3がみられ、装飾性が高い。第9図19～21を典型例とし、22～31を可能性がある土器として考えているが、1類に帰属するものもあると思われる。

##### 深鉢形土器4類(棒状工具による沈線文+繩文地文)

器形は深鉢形土器I-1・2で、技法e・f・h・i・j、文様3・4がみられる(第8図1～4など)。

##### 鉢形土器1類(幅広の竹管文)

幅8～9mmの竹管を用いており、内面横位施文の条数は2～3本である(第11・12図72～76)。2類に較べ条数が少ないので、竹管の幅が広いことに起因すると思われる。技法d・gがみられ

る。なお外面に施文した例はないのも2類との違いである。また単位文の起点としての文様3を施文する。

#### 鉢形土器2類(幅の狭い竹管文)

幅3~6mmの竹管を用いる(第12図77~86)。内面横位施文の条数は3~5本で、1類に較べ条間にゆとりをもって施文している。条数が少ないものは文様帶幅も狭い傾向がうかがえる。技法dは少なく、また技法gはないようである。外面や口唇部施文が特徴的で、外面には縄文や竹管文、口唇部には技法bにより押し引き文(爪形文)を施文する。

#### (2) 1号竪穴出土の土器

1号竪穴には深鉢形土器1類(5・6)、4類(1~4)がある。時期は多摩丘陵・武藏野台地を中心とした編年(1995 黒尾・小林・中山、以下「多摩・武藏野編年」)に照らし合わせると、中期初頭として五領ヶ台式期が4期7細別されているうち、3b期(口縁部文様帯が明確化し、単沈線が主体)に相当する。從来の五領ヶ台式II式。今村啓爾氏(1985 今村)の五領ヶ台IIb式期。

#### (3) 2号竪穴出土の土器

2号竪穴には深鉢形土器4類(1~4)があり、器形I-1(1~3)、器形I-2(4)がある。また波状口縁で器形I-1-1の7は技法g・jをもつ異質な土器であり、小林謙一氏のいう在地化した東関東八辺式系の土器であろう。1~6には技法eによる文様4・5が口縁部、あるいは頸部・胴部に施文されており、特徴的である。時期的には多摩・武藏野編年の4b期(弧線文の最盛期)で、五領ヶ台式末期である。今村氏の五領ヶ台IIc式期。

#### (4) 遺構外出土の土器

深鉢形土器1類(1~9)、2類(11~18)、3類(19~21)、4類(32~59)がある。このうち3類は多摩・武藏野編年II期、今村氏の五領ヶ台IIa期に相当するもので、五領ヶ台I式の集合沈線文系土器の流れに位置づけられるものである。1・2類は多摩・武藏野編年IIIa期に相当する。4類は多摩・武藏野編年IIIb期~4期で、口縁部に弧線文がある37は4a期に、また弧線区面が隆線で表現される32・36などは4b期と思われる。鉢形土器は1類(72~76)、2類(77~86)があり、洛沢式の幅の広い角押文により近い1類が新しく(4b期)、幅の狭い2類はそれ以前ではないかと思われる。87~91は口縁部外面に縄文・沈線文をもつ土器で、鉢または深鉢であろうと思われるが器形が不明な一群である。

このように山影遺跡出土土器は、五領ヶ台式の範疇で理解されるものであり、近年の時期細分に基づけば、4段階程度の細分ができる。竹管文施文から棒状工具施文へ、またモチーフ的には弧線文化という流れが見られ、中部山岳地帯の標準的なあり方と思われる。

#### 参考文献

- 黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995 「多摩丘陵・武藏野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平』 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会  
今村啓爾 1995 「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」『東大考古学研究室紀要』4

## VII 山影遺跡出土の人骨調査について

動植物遺存体調査研究会

### 1 調査に至る経緯

並崎市山影遺跡の焼骨を出土した1号土坑に関する分析依頼が1994年3月に並崎市遺跡調査会からあり、当研究会との間で委託契約を結び調査を行った。以下は報告にいたる調査経過である。

依頼を受けた資料はコンテナ1箱程度に入った1号土坑出土の焼骨および覆土の土壤で、そのほかに炭化物が1点、土器片が2片、黒曜石の大型フレイク2点があった。焼骨は出土地点ごとに分けて取り上げられており、それぞれの袋には主だった骨のほか細片化した骨片や骨粉が混入した土壤が同封されていた。土壤は、土坑内土壤すべてをサンプリングしたのではなく、骨の中箇所を中心に集めたものであった。

### 2 調査目的と方法

調査の目的は、出土焼骨の同定分析を行い、焼骨が何の骨であったか、その個体数、年令、性別、病歴などを調べること、土壤を水洗し、植物遺存体を採取・同定し、古環境の推定を行うことである。それらの同定結果をもとに土坑の性格の追求、焼骨埋納過程の推定復元を行うこととした。

調査方法は次の通りである。大きな骨はあらかじめ抽出、洗浄し、乾燥させる。骨混じりの土壤は浅い入れ物に広げて半日程度乾燥させ、その後少量づつパケツに入れた水に静かに投下する。その際、乾燥した炭化物は水面に浮上するため、それらを茶漉しなどを用いてすくう(浮遊選別)。比重の重い骨類は沈むので、炭化物を回収したあと泥混じりのパケツの水を、0.5mmメッシュのふるい(径20cm)にあけ、軽くシャワーをかけて泥を洗い流し、残滓を観察し、骨類、炭化材、炭化種実など種別ごとに筆やピンセットを用いて取り上げる。取り上げた試料の水分を取るために、キッチンペーパーなどの上で乾燥させた後、小さなプラスチックケースに入れる。またその他の残滓も保存しておく。

### 3 調査経過

調査期間は1994年3月から翌95年3月までとした。この間、当研究会では研究会を2回開いて、会員で山影遺跡の資料に関する調査方法や同定結果についての中間報告、検討を行っている。

調査は、最初に水洗選別を行い、多量の骨を回収した。土壤が非常に黒味の強い色調だったので炭化材の混入が当初予想されたが、炭化した植物遺体は皆無であった。骨は、主だったものには取り上げ番号を注記し、脆いものに対してパラロイドをアセトンで溶かした溶液を部分的に塗布した(後に、化学的分析するものには塗布すべきではないとの指摘を受けた)。被熱して破碎した資料が多いと思われたため、接合作業を行い、セメダインで接着した。写真撮影後、重量を測定し、標本箱に収納した。

骨の同定については、調査当初には獸骨ではないかとの予想があったので、まず第1回研究会

で獸骨や魚骨に詳しい樋泉岳二氏(早稲田大学文学部考古学研究室)に見てもらった。その結果、獸骨ではなく、人骨であろうとの判断をいただいた。その後、北村遺跡(長野県明科町)などで出土人骨の調査研究を行った茂原信生氏(獨協医科大学第一解剖学教室、現京都大学靈長類研究所系統進化部門)のもとへ資料を運び、同定・分析してもらうこととした。その後、調査結果について報告書を受け取り、資料を返却してもらい、幼児を1体以上含む7個体以上の焼人骨であることなどが判明した(茂原報告書を参照)。なお骨の重量は次のとおりである。

H 1 - 157.77g	H 2 - 264.78g	H 3 - 204.01g	H 4 - 47.10g	H 5 - 723.63g
H 6 - 72.29g	H 7 - 6.46g	H 8 - 720.68g	一括 - 912.76g	計 - 3109.48g

#### 4 山影遺跡(山梨県韮崎市)出土の縄文時代火葬人骨

京都大学靈長類研究所

茂原信生

##### I) はじめに

山影遺跡は山梨県韮崎市藤井町南下条にある遺跡で、韮崎市遺跡調査会によって平成5年に発掘調査された。この報告書で扱う人骨はその際に出土したものである。人骨は副葬品などから縄文時代中期初頭のものと考えられている。出土した骨片に獸骨は混入していない。

##### II) 出土状況

長径210cm、短径140cm程の大きさの土坑に散乱した状態で出土した。出土した骨は程度の差こそあれすべて焼かれたものである。土坑内で比較的まとまりのある7ヶ所に区分されて取り上げられた。四肢骨などでは10cmを上回る大きさの骨片もあるが、ほとんどは細片化している。

四肢骨や頭蓋骨には亀裂が多く入っており、出土した骨もかなり細片化している。焼かれた骨はBaby(1954)やTrotter他(1955)によれば、軟部が付着していると著しい骨の変形が起り、細かな亀裂が多数できるという。晒された骨は焼かれてもあまり変形せず、大きく割れことが多いという。したがって、山影遺跡から出土した骨は軟組織がついたまま火葬されたものと考えられる。火葬された温度は骨の状態から判断して比較的高温(800度前後)であると考えられ(S tewart; 1979, Buikstra他; 1973)、出土している部分に温度差を示す色のむらはほとんどない。

##### III) 出土人骨の特徴

まとまって取り上げられた部分ごとに(H 1 ~ H 8)記載し、とくに区別されなかったものを土坑一括として最後に記載することにする。

###### H 1

比較的小さなまとまりである。おもに頭蓋骨片が出土している。四肢骨片は1点、他に肋骨片が1点ある。側頭骨、後頭骨などが出土している。側頭骨には頬骨弓、下頬窩が認められる。焼かれて縮小していることを割り引いても小さめの側頭骨である。他に右側頭骨錐体が出土している。後頭骨は比較的頑丈である。このまとまりで出土した90%以上は頭蓋骨片である。

## H 2

ほとんどが3cm以下の細片である。頭蓋骨片はほとんど見られない。手根骨、手指骨、下頸骨右関節突起基部などが出土しており、それ以外は四肢骨の細片である。手根骨の右舟状骨は最大長が22.1mmである。この骨の大きさは現代関東地方人男性では27.55mm、女性では23.84mm(加藤他; 1959)であるからこれらよりも小さい。火葬されると骨は重量で約35%ほど減少する(Trotter他; 1955)ということから判断して長さは約13%ほど縮小することになる。この舟状骨のもともとの長さは25.4mm程度であったことになる。この値は現代関東地方人の男性と女性の中間的な値である。

## H 3

少數の頭蓋骨片と四肢骨片、椎骨片、肋骨片などである。頭蓋骨には右上頸骨や前頭骨片、後頸骨、側頭骨などが含まれている。右上頸骨は正中から第1大臼歯部までの歯槽を含んでいるが抜歯は見られない。側頭骨は左右の錐体部である。椎骨はおもに頸椎片で、第1頸椎右半が含まれている。四肢骨で確認できるのは上腕骨、左右の距骨(足根骨の一つ)、指骨である。

## H 4

少數の頭蓋骨片と四肢骨片である。量的には少ない。四肢骨片は細片で部位が不明である。

## H 5

多量の骨片が出土している。手根骨や足根骨などの短骨では完形のものも見られるが多くは細片である。左側頭骨錐体、後頭骨大孔付近、上頸左第1大臼歯部、成人の下頸骨2点、子供の下頸骨1点、椎骨、上腕骨頭、手根骨、指骨、寛骨(腸骨)、大腿骨頭、大腿骨遠位部骨幹後面、腓骨片、足根骨などが出土している。したがって、1体だけではなく少なくとも成人2、子供1の計3体は含まれている。

下頸骨1は右の第1大臼歯部から左の第2大臼歯部までの下頸体である。オトガイ隆起がよく発達しており、オトガイ結節もやや発達しているのでオトガイ三角は明瞭である。左の中切歯、側切歯が脱落しており歯槽が閉鎖している。抜歯によるものであろう。下頸骨2はやはり成人のものと思われ、左の正中部から第1大臼歯部までの下頸体である。外側結節がよく発達している。抜歯に関しては前歯部の歯槽が失われており不明である。子供のものと思われる下頸骨は左の第1小白歯(第1乳白歯)から右の第1大臼歯部までの下頸体で、歯槽の位置から判断して第1大臼歯が萌出中であり、犬歯などの永久歯が歯槽骨内で形成されている途中である。したがって、5~6歳と思われる。性別は不明である。下頸の関節頭が右2点、左2点出土している。いずれも比較的大きく成人のものと思われ、さきに述べた5~6歳の子供に相当するような小さな下頸頭はない。したがって、ここに埋葬あるいは火葬された個体数は3体以上ということになろう。

椎骨の椎体では加齢変化の骨棘の著しい発達が見られるものが含まれている。老齢の個体が含まれていたことを示している。

四肢骨では腓骨などがよく残されているが、さほど頑丈なものではない。

量的には少ない。少量の頭蓋骨片、椎骨片、肋骨片および四肢骨片である。頭蓋骨片は側頭骨片以外は部位不明である。椎骨には第1頸椎右半と、この頸椎とは到底対応していないほど小さな頸椎体が含まれている。

## H 8

量的にはH 5に次いで多い。多くの頭蓋骨片と比較的形の大きな四肢骨片、少量の椎骨片が出土している。頭蓋骨片は後頭骨外後頭隆起部、前頭骨右頬骨突起部、右側頭骨錐体2点、左側頭骨錐体2点、左頬骨、下頬骨右関節頭などがみられる。

四肢骨は大腿骨骨幹、脛骨骨幹、腓骨骨幹などがみられる。腓骨はかなり大きさの異なるものであり、小さいほうは子供のものである可能性がある。

## 土坑一括

上記の比較的まとまった部分以外に出土したものの中から主なものを取り上げると、前頭骨眼窩部、左側頭骨錐体3点、右側頭骨下頬窩2点、左頬骨2点、右頬骨2点、左上腕骨遠位部、前頸骨正中部、肩甲骨、尺骨、椎骨などである。

前頭骨の眼窩部は、眼窩の上面が残っておりクリブラ・オルビタリアがみられる。クリブラは鉄欠乏性の貧血による骨侵蝕によって眼窩上壁に形成されるフルイ状の孔(Hirata:1988a)で、本例の物はNathan & Haas(1966)の分類による「cribrotic」の段階の物で中等度のものである。縄文時代人では9%程度に見られるという(Hirata:1988b)。

## IV) 山影遺跡人骨の特徴

出土した各骨の個体識別が出来ないため、個々人の特徴は不明である。土坑内の骨の散乱の仕方にはとくに一定の方式があるようには思えず、土坑のどの位置からも頭蓋骨片が出土している。しかし、量的な偏りや頭蓋骨が主に出土している部分などもあるので、まったくでたらめというものではない。

出土した部分で重複した主な部位は、左側頭骨錐体7点、右側頭骨錐体4点、下頬骨正中部3点、下頬骨下頬頭が右3点(成人のもの)で左が2点であった。したがって、この土坑に埋葬、あるいはここで火葬された個体は少なくとも7例ということになり、多くは成人であろうが、5~6歳の幼児が1例含まれている。ただし、側頭骨錐体だけからは幼児のものであるかどうかの判定できない点は注意しておかなくてはならない。

火葬され形態がひどんでいるので形態的な特徴はほとんど抽出できなかった。病的な変化としては、眼窩に鉄欠乏性貧血によるクリブラ・オルビタリアが観察された。椎骨の老齢変化であるリッピング(骨縫)の形成も観察された。

出土した骨の総重量はおよそ3100グラムであった。火葬された人骨1体分の重量は重量の減少率(Trotter他:1955)、ヨーロッパ人の火葬骨の重量(Trotter:1954)、さらには平本(1977)の報告している縄文時代人の推定身長などを加味して考えると縄文時代人男性で約2300グラム、同じく女性で1855グラムである(茂原・松島:1996)。これと比較すると今回山影遺跡から出土した焼かれた骨の重量は男性の1体分あまりの量である。もし、上記のようにこの土坑に関係する成

人7体の焼かれた骨がすべて残っているとすれば、その総重量は19,100~12,985グラムのはずであり、出土したものはその1/6~1/4程度で少ないとになる。埋葬中に浸食されて消失した可能性が高いが、火葬されて焼かれた後に主な部分が他に埋葬されたか遺棄された可能性もないとは言えない。

#### V) まとめ

山影遺跡からは比較的高温で焼かれた人骨が総量で約3100グラム出土した。この土坑に埋葬された個体数は左側頭骨の難体が7つ出土しているので少なくとも7例ということになり、そのなかには5~6歳の幼児1体が含まれていた。性別は不明である。病的な変化としてクリブラ・オルビタリアが観察された。

本人骨の調査の機会を与えて下さった動植物遺存体調査研究会の椿原功一氏に厚く感謝いたします。

#### 参考文献

- Baby, R. S(1954) : Hopewell cremation practices. Ohio Hist. Soc. Papers Archaeol., 1;1-7.
- Buikstra, J. E. & Goldstein, L. (1973) : The Perrins Ledge Crematory. Illinois State Museum, Reports of Investigations, No. 28;1-40.
- 平本嘉助(1977) : 日本人身長の時代的变化。自然科学と博物館, 44(4);169-172
- Hirata, K. (1988a) : A Contribution to the Palaeopathology of Cribra Orbitalia in Japanese. 1. Cribra Orbitalia in Edo Japanese. The St. Marianna Med. J., 16(1);6-24.
- Hirata, K. (1988b) : A Contribution to the Palaeopathology of Cribra Orbitalia in Japanese. 2. Secular Trends in the Prevalence of Cribra Orbitalia. The St. Marianna Med. J., 16(2);215-229
- 加藤守男、原田遼二(1960) : 関東地方人手骨の人類学的研究。東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集, 21.
- 茂原信生・松島和巳(1996) : 中村中平遺跡(長野県飯田市)から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片。飯田市美術博物館研究紀要6; 137-151
- Stewart, T. D. (1979) : Burned Bones. In "Essentials of Forensic Anthropology" Charles C. Thomas, Springfield;59-68.
- Trotter, M. (1954) : A Preliminary Study of Estimation of Weight of the Skeleton. Amer. J. Phys. Anthropol., 12;537-551.
- Trotter, M. & R. R. Peterson(1955) : Ash Weight of Human Skeletons in per cent of their Dry, Fat-Free Weight. Anat. Rec., 123;341-358.

写真1：山影遺跡から出土した火葬骨。

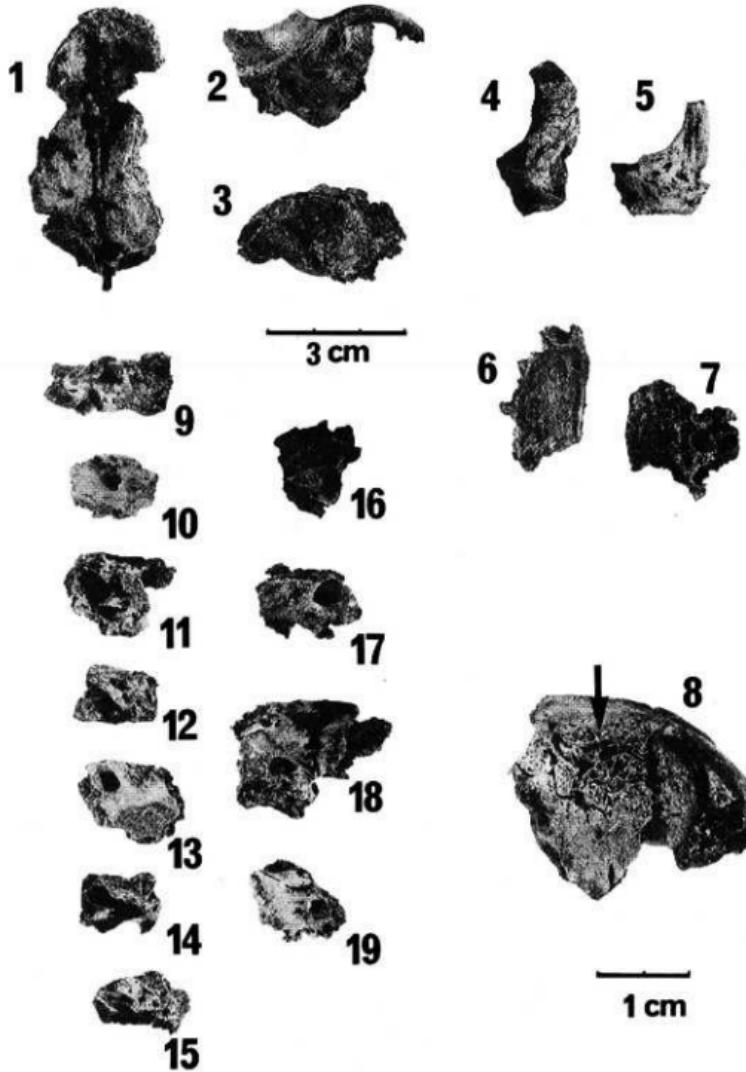
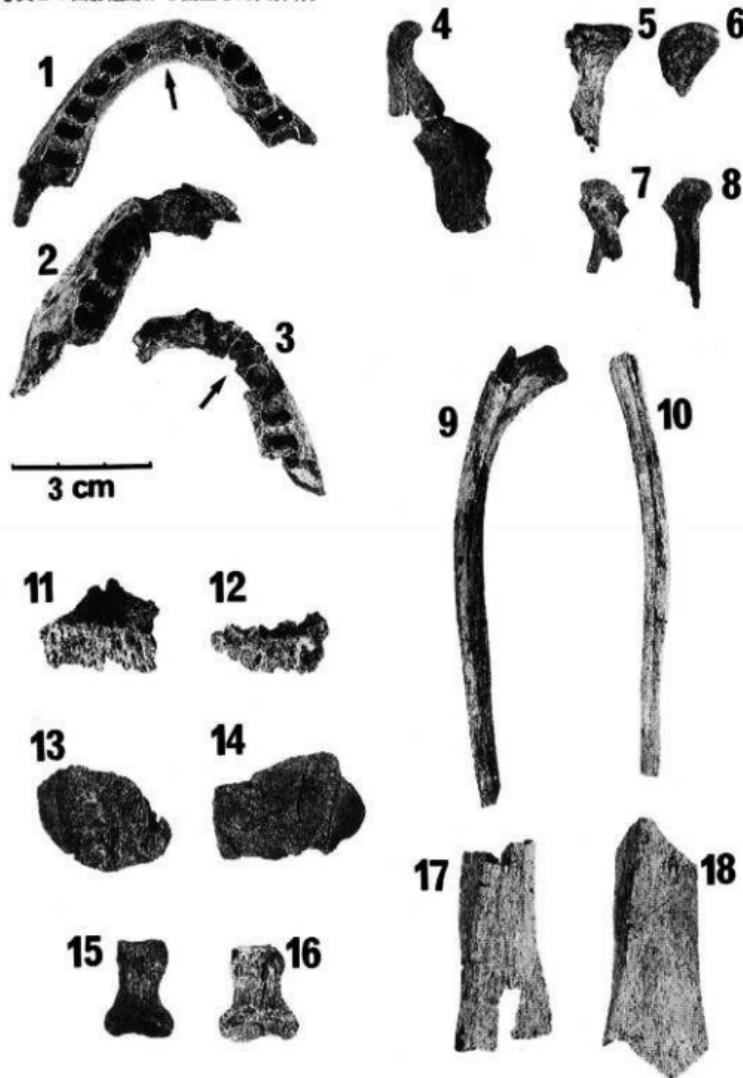


写真2：山影遺跡から出土した火葬骨。



- 1 : 下顎骨(1)上面。矢印は抜歯されている左第1切歯と左第2切歯部  
 2 : 下顎骨(2)上面  
 3 ; 5～6歳の子供の下顎骨上面。矢印は永久犬歯の形成されている歯槽部を示す  
 4 : 右下頸関節頭外側面  
 5～6 : 右下頸関節頭前面  
 7～8 : 左下頸関節頭前面  
 9 : 尺骨骨幹  
 10 : 腕骨骨幹  
 11・12 : 椎体に形成された骨縫(リッピング)  
 13 : 左距骨上面  
 14 : 右距骨上面  
 15～16 : 足の親指の基節骨  
 17～18 : 大腿骨遠位骨幹後面。

## 5 考古学側からの報告についてのコメントと今後の課題

### (1)人骨の時期と埋葬形態

埋葬された焼人骨は、石川日出志氏によれば(註)縄文～弥生時代にかけて全国で32例以上あり、最古例としては岡山県児島郡瀬崎町彦峰貝塚例が前期中葉例として知られている。中期後半に長野県幅田遺跡にあり、その後、後期から晩期にかけて長野県を中心とした中部高地で数多くの分布が認められる。山梨県内でも長坂町長坂上条遺跡で後期末～晩期初頭頃の例がある。石川氏によると、焼人骨の埋葬方法は5群に分けられるという。

- a群 各種配石遺構に伴う一群
- b群 墓坑に直接焼人骨を納めた一群
- c群 再葬墓とよばれる壺棺内もしくはこれに関係することの明瞭な一群
- d群 岩陰や洞窟を墓地とした例
- e群 方形周溝墓や土坑墓の例で、墓坑内に遺体を納めたのちに焼いたとみるべき一群

山影遺跡例は覆土中に混入縄とみられる多くの縄が遺存したが、明確な配石や石組み遺構ではなく、土坑中に直接納めたb群といえる。石川氏によれば、b群は後期前半と考えられる岐阜県益田郡萩原町桜洞遺跡例が最古例で、晩期後葉の馬見塚遺跡(愛知県一宮市)、御社宮司遺跡(長野県茅野市)が下限とされ、その分布が「配石遺構の希有な西方に偏っている」との指摘がある。山影遺跡例はb群でも最古となり、また位置的には中部高地のどちらかというと東側で、分布上ではb群の東端例となる。いずれにしても、大枠では焼人骨埋葬の盛行した中部高地地域の一例として捉えられ、中でも多量の焼人骨を一括埋葬した初現的な例として評価できる。

山影遺跡の埋葬形態は、土坑内に焼土がなく炭化物も少ないとから、土坑内で焼成したのではなく、別地点で焼成後、一括埋葬したものである。この点は各地の事例と共にし、石川氏によれば縄文時代の墓坑内での確実な焼成例はわずか3例だけだという。また人骨の出土量は、7個体以上想定されるのにもかかわらず全重量が少ないため、火葬した骨の一部を埋葬している。骨の状態をみるとかなりの高熱で焼成されているので、粉末化して全部を取り上げられなかったか、あるいは意図的に主要な骨だけを埋葬したかと思われる。

骨は、ブロック状のまとまりをもって土坑内に分布するものの、雑然と投入したような感があり、骨を並べるような配置は全く認められない。ただし、茂原氏も指摘するようにH1では頭骨片が目立つなど、骨のまとまりの中に選択的な傾向も窺えるが、あまり明瞭でないことは確かである。

では、7体以上の人骨がどのようにして一括埋葬されるに至ったのか。土坑内の骨の分布状況から火葬されたのは同一時らしいので、可能性としては同時期に死亡した遺体を同時に火葬し、骨を拾いだして土坑に埋葬したと思われる。死因については、骨に痕跡を残すような病気ではなく、急速に多くの人々に蔓延して死に至らしめるような食中毒などの突発的病死を想定したい。そうした異常死の場合に通常の埋葬形態をとらずに焼却という形で対応したのではないか。また死者の間柄は、一家族分ともまた数家族分とも考えられ、同一土坑に埋葬している点を考えれば、

まったくの他人同志というよりは血縁度の高い関係を想定できるだろう。

(註)石川日出志「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』74 1988

## (2)抜歯

H5出土の下顎骨1(成人・年令不詳)には左の中切歯・側切歯が脱落・歯槽閉鎖し、抜歯と考えられるという。土坑の時期の最も可能性が高いと思われる五箇ヶ台式期での抜歯例が全国的に見た場合どうなのか明らかでなく、また中部山岳地帯では人骨遺存例も少ないため、山影遺跡周辺での抜歯の実態は不明である。縄文後～晩期には長野県内で抜歯人骨が8例ほど知られているが、後期前半中心の人骨が大量に出土した北村遺跡(長野県明科町)では抜歯でないと思われる脱落歯をもつ例はあるものの、その出現頻度は10%と低く、総合的には抜歯風習はなかったと判断されている(註)。山影遺跡例は下顎切歯を抜歯する点で晩期に多い抜歯方法に類似し、人骨自体の時期の再検討が改めて要請されてくると思われるが、中期段階での抜歯例が十分に出揃っていない現段階では、一応中期初頭例としての資料提示に留め、その意義については今後の評価にゆだねたいと思う。

(註)茂原信生「人骨の形質」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書II 北村遺跡』1993

## (3)調査のあり方についての提言と反省

遺跡調査時に本遺跡のような例に遭遇した場合、どう調査を進めたらよいか。今後の教訓として記しておきたい。

〈出土状況の記録方法〉 通常、土坑として認識してから調査のメスをいれていくが、土坑の場合、断面観察するために半截する。大きめの土坑であればセクションベルトを十字に設定して、ベルトに沿って試掘溝をいれるのが習慣であろう。その過程ではじめて細片化した骨が多量に含まれているとわかった場合、どうすべきか。骨ごと土壤をすべて採集することが望ましいが、出土状況の記録のためには記録すべき骨を残したまま土壤を除去・採集しなければならない。検討の余地はあるものの、現時点での見解を述べたい。

骨ができるだけ残しながら掘り込み、微粉化したり微細片化した骨は土壤とともに20cm～50cm程度のメッシュを組んでブロックごとに一括的に採取しておく。層位的にサンプリングする必要がある場合は縦方向にもメッシュを組むか、あるいはセクションを観察したのち、ブロックごとに層位的に採集する。土層観察は、骨が一括埋葬されたのか、順次埋葬なのか判断する材料になるので必要である。平面図は微細図で記録したほうがよいが、細片ではドットでもかまわないだろう。縮尺は10分の1程度、場合によっては2分の1でもよい。炭化物や焼土、灰などの有無には十分な注意を払い、分布を記録し、採取する。また壁の被熱状況も観察する。

〈骨の取り上げ〉 骨は平面図作成後、大形破片については1点1点番号をつけて取り上げたい。しかし、今回のケースのように多量の細片化した資料の場合、ある程度の大きさ以下の骨をブロックごとの一括取り上げとし、埋葬方法解明のために有効な資料のみをナンバリングすることもやむを得ない。

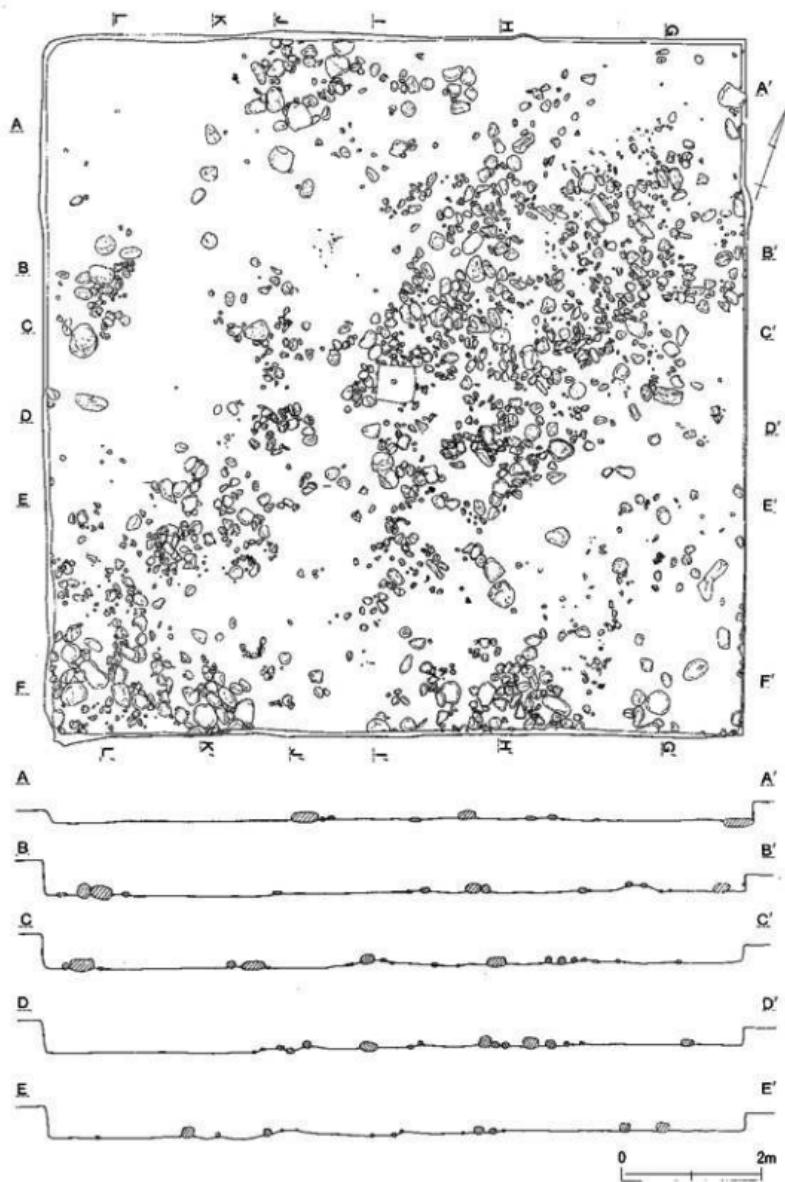
＜土壤のサンプリング＞ ブロックごとに一括でまとめ、できるだけすべての土壤を採取しておくことが望ましい。別に花粉分析などを行うために土柱として、あるいはフィルム容器などで層位的に土壤採取しておく必要もあるう。

＜時期決定＞ 伴出土器があれば時期推定できるが、やはりC<sup>14</sup>年代測定を可能な限り行いたい。とくに山影遺跡例のように出土土器が小破片の場合、時期決定は慎重に行わなければならず、もっと早い時点で年代測定に炭化物をまわすべきであったと反省している。今後機会を見て、できれば分析したい。なお、骨や歯でも年代測定できるが、骨の場合、かなりの量が必要といわれ、また歯では焼骨化すると小さく縮んでしまうので、今回は実施を見送った。いずれにせよ、報告書刊行までのある期間を見込んで計画的に実施すべきである。

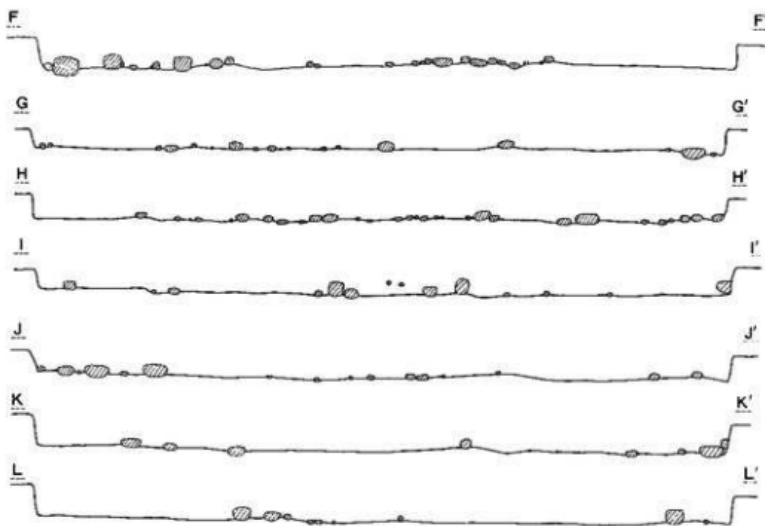
＜周囲の遺構の調査＞ 本遺跡例のように土坑内に焼成痕跡がない場合、別の場所で火葬したことになるが、おそらく周囲に火葬施設が存在したはずである。また一旦、土中に埋葬して掘りだして火葬にした場合だと1次葬に関わる土坑があると思われる。したがって、周囲の遺構の様子にも注意しなければならない。

＜洗浄等の室内作業＞ 土壤は骨を多数含んでいるので、今回の作業のように水洗選別で微細な骨を取り出す。また同時に炭化物や微細遺物を採取する。炭化物は古環境の推定復元のために専門機関に同定してもらう必要があるが、炭化物がなぜ土坑覆土中に混入したのか、調査した側で考えなければならない。またすべての土壤を洗い流してしまわないで、保存用サンプルとして一定量を保存する。

＜自然科学的分析＞ 今回、焼けた骨から何がわかるだろうかと検討したが、最近はやりの炭素・窒素同位体比による食生活の分析は、焼骨化しても可能だそうである。その場合、肋骨など形質人類学的な調査に影響しない資料を提供すればよいという。これも年代測定同様に計画的に分析依頼したい。できれば個体別に実施したいところではあるが、今回のような状況では困難である。いずれにせよ、人骨とその覆土はいろいろな情報をもっており、今後新たな視点での自然科学的分析の実施も予測されるので、将来の可能性を残し、かつ予算的・期間的に現時点で考えられる限りの分析を可能な限り実施すべきであろう。



第18図 遺跡調査区域平・断面図(1/80)



第19図 遺跡調査区域断面図(1/80)

## VIII まとめ

前項まで見てきたように、今回の調査で発見された遺構は僅かに竪穴2基、土坑1基であったが、出土土器は縄文時代中期初頭というごく限られた時期のもので、しかも狭い発掘調査面積にもかかわらず比較的多量に出土した。遺構の性格は、土坑以外の竪穴は不明と言わざるを得ないが、本遺跡はあるいは短い期間で使われた土器捨場であったのかもしれない。

1号土坑からは多量の骨・骨片が出土しており、発掘当初は獸骨ではないかと考え、調理・食事した後に穴に捨てられたものであろうと推測していた。そこで当時の食生活や環境が本土坑の骨や土壤から明らかになればと考えて、骨の集中箇所を中心に7ヵ所程の大きなまとまりに分け、土壤とともに動植物遺存体調査研究会に分析を依頼することとした。その結果は前項の報告のとおりであり、植物遺存体は無く、骨は人骨でありしかも火葬されたものであることがわかった。骨は7固体分あり内1例は幼児が含まれるという。本土坑は別の場所で火葬して残った骨の一部分を埋めた墓坑ということになるが出土土器は五領ヶ台式であり土坑の時期は縄文時代中期初頭になり、焼人骨の例としては早い時期のものということができる。ただし報告文中にあるように時期決定の根拠が土器片2点だけであるので、今後の類例を待ち慎重に扱ったほうがよいであろう。なお、今回は花粉(微化石)分析を行わなかったが、イラクのシャニダール洞穴のネアンデルタール人埋葬人骨周辺の花粉分析の結果からは、死体周辺に花が置かれていた状況が明らかにされている(Leroi-Gourhan 1975 「THE FLOWERS FOUND WITH SHANIDAR IV, A NEANDERTHAL BURIAL IN IRAQ」『SCIENCE』190, 562~564)。死体を単に埋めるだけでなく、死者に花を手向けるというネアンデルタール人の死ないし死後に対する観念が花粉分析によって理解できることになるのであるが、縄文時代の人々はどうであったであろう。

山影遺跡の発掘調査で発見された遺構並びに遺物は、縄文時代中期初頭のもので、これらは当時の社会を解明するうえで貴重であり、土器研究や墓制研究などに良好な資料となるであろう。今回の報告は限られた作業のなかでなされたもので不十分な点もあるかと思われるが、本報告書が今後の調査・研究に活用されれば望外のよろこびである。

# 写 真 図 版



遺跡遠景



発掘風景



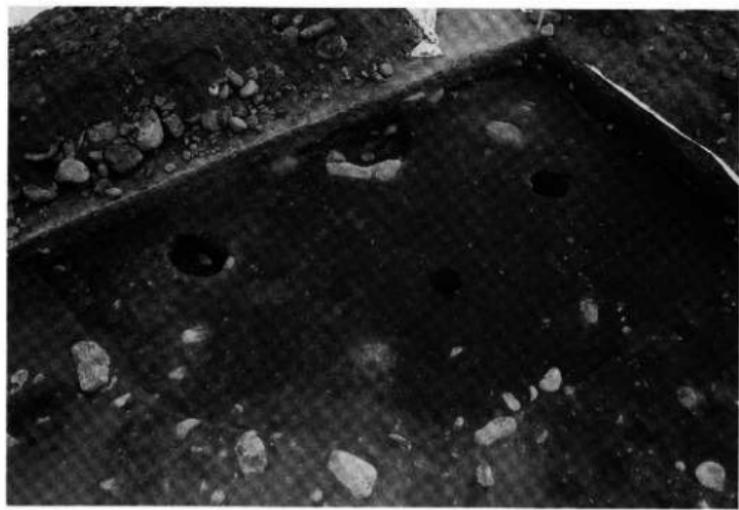
発掘風景



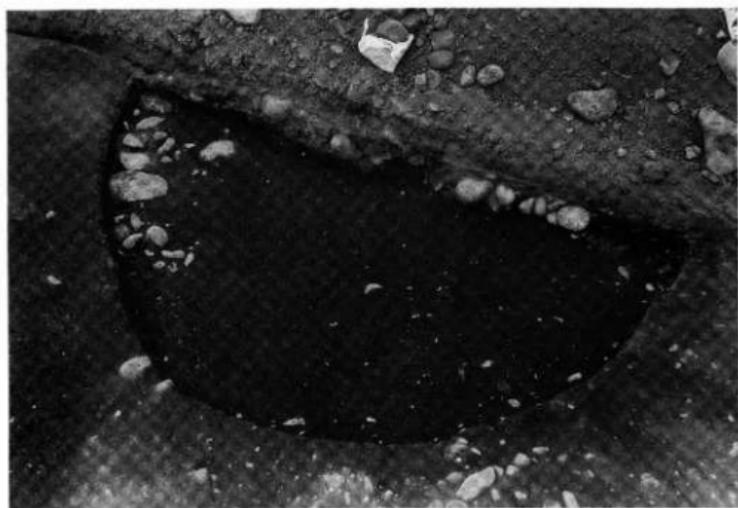
遺跡全体



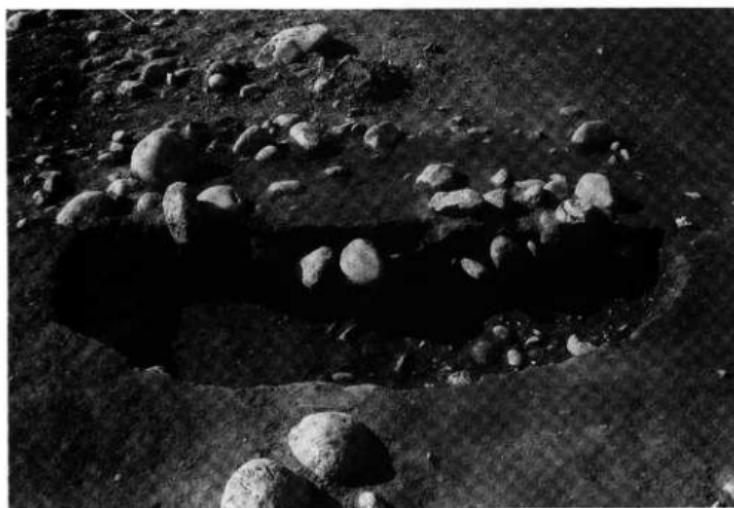
測量風景



1号竖穴



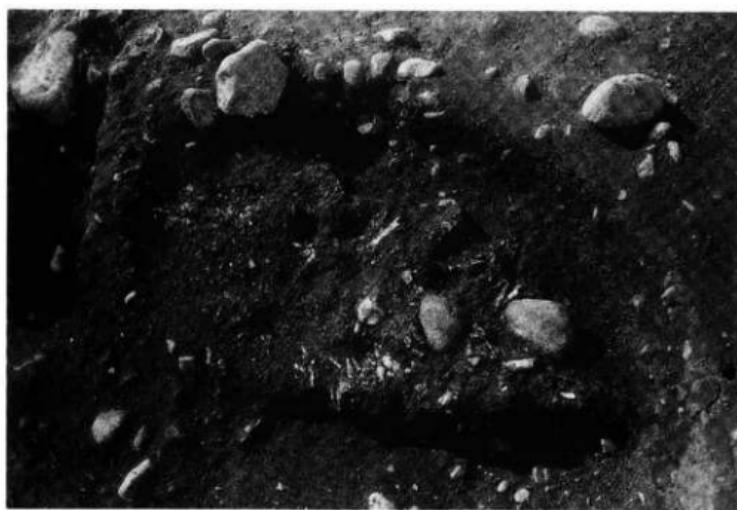
2号墳穴



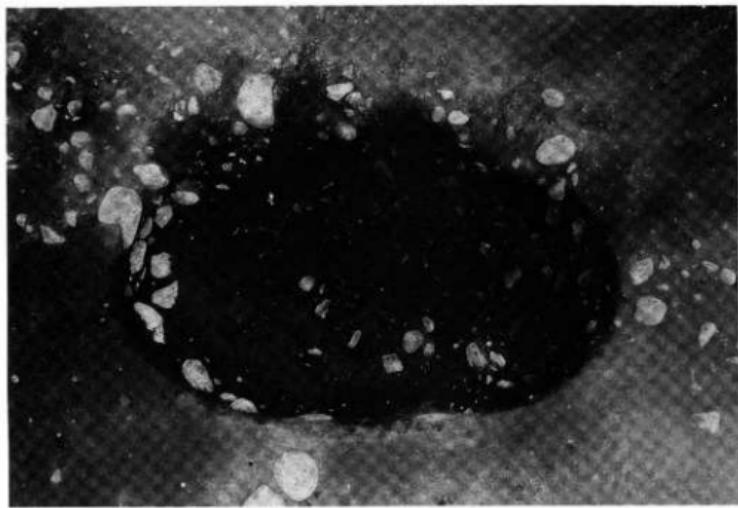
1号土坑



1号土坑発掘風景



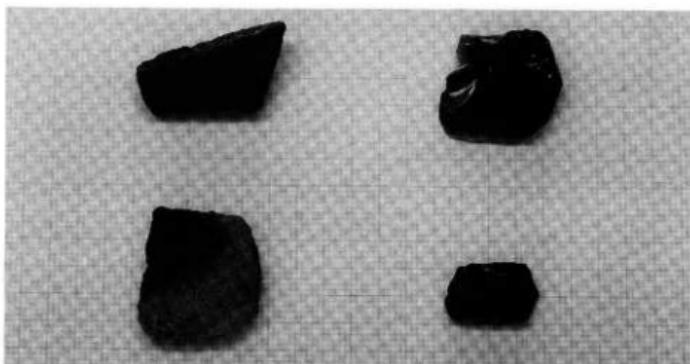
1号土坑骨出土状況



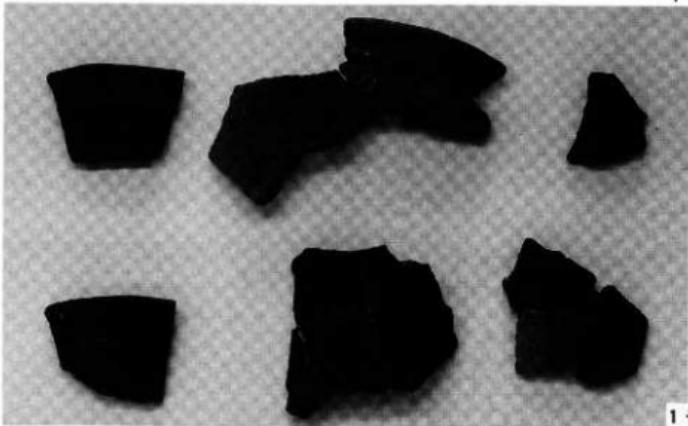
1号土坑



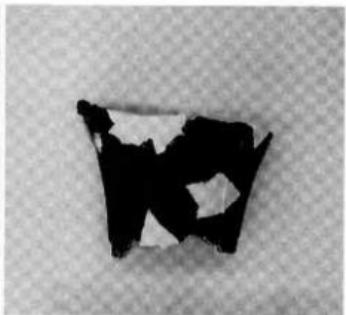
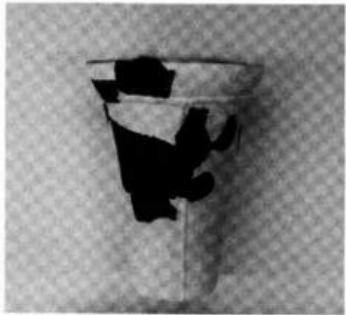
遺跡近景



1号土坑出土遺物



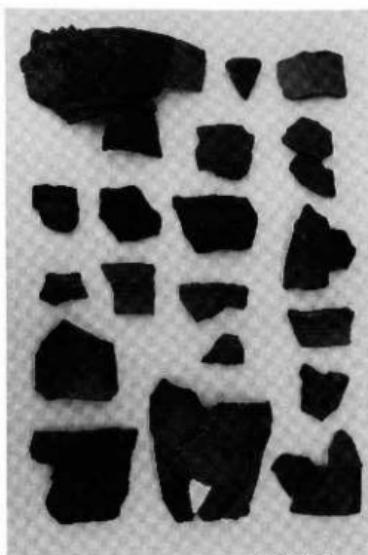
1号竖穴出土土器



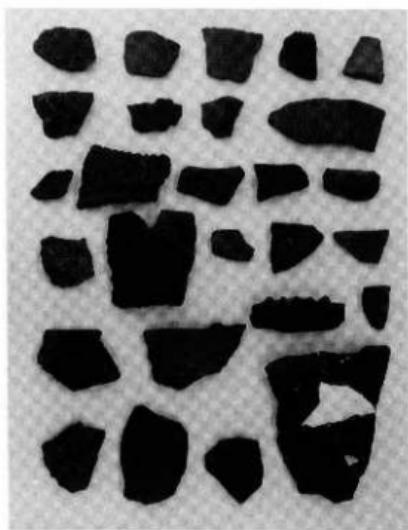
透構外出土土器



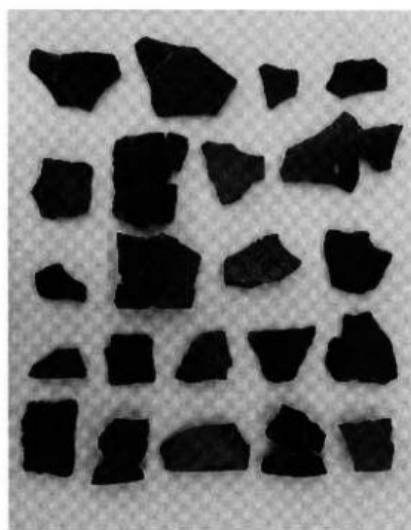
2号竖穴出土土器



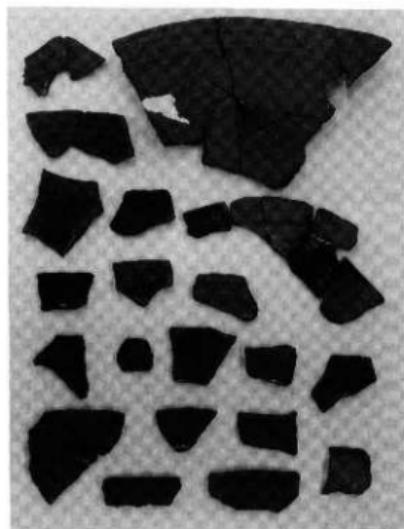
遗構外出土土器



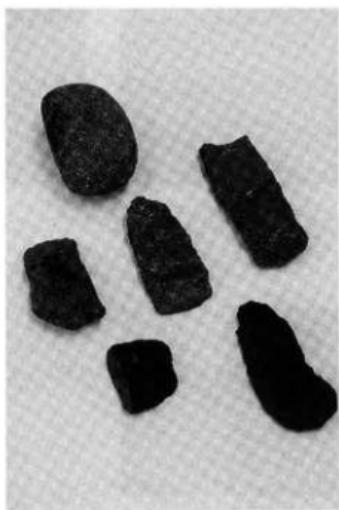
遗構外出土土器



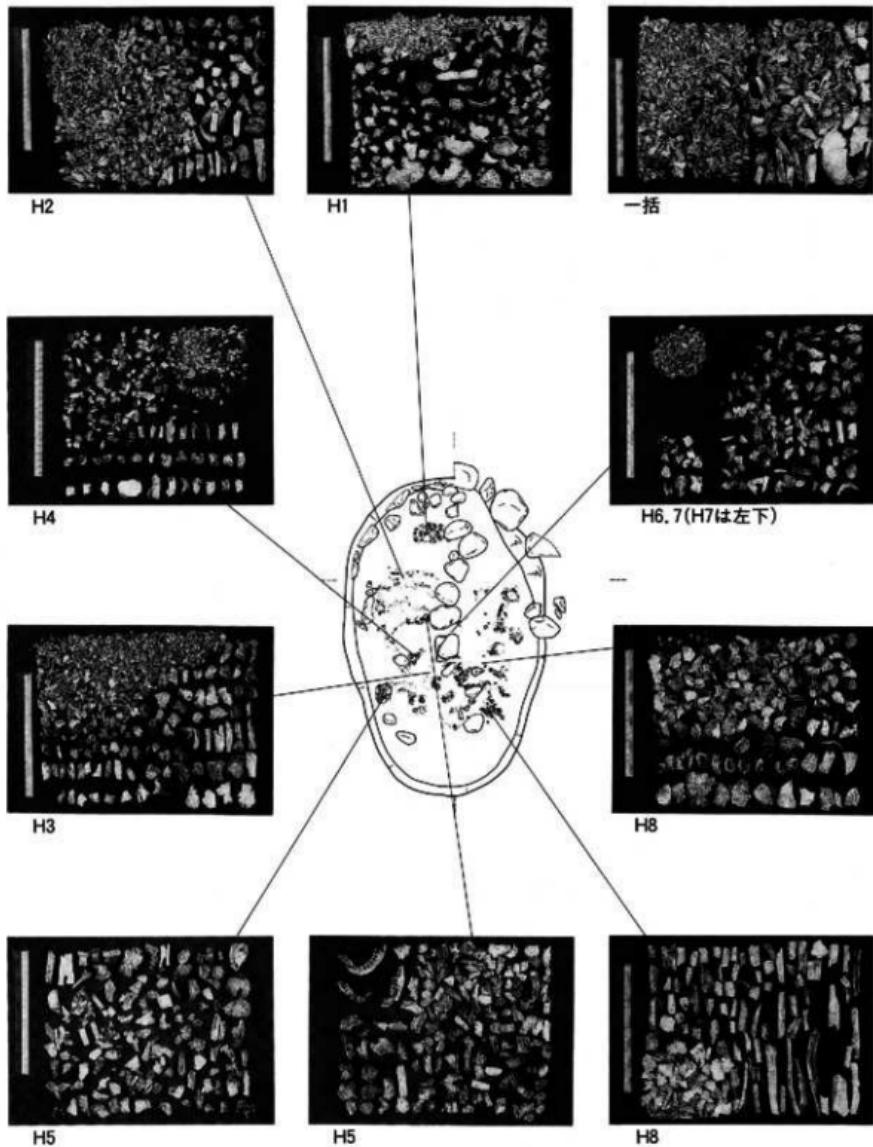
遗構外出土土器



遺構外出土土器



石 器



1号土坑出土人骨

---

---

## 山影遺跡

発行日 1997年3月31日

発行 莖崎市遺跡調査会  
〒407 山梨県莘崎市水神一丁目3番1号  
TEL 0551-22-1111(代)

印刷 有限会社 タクト/印刷・デザイン

---

